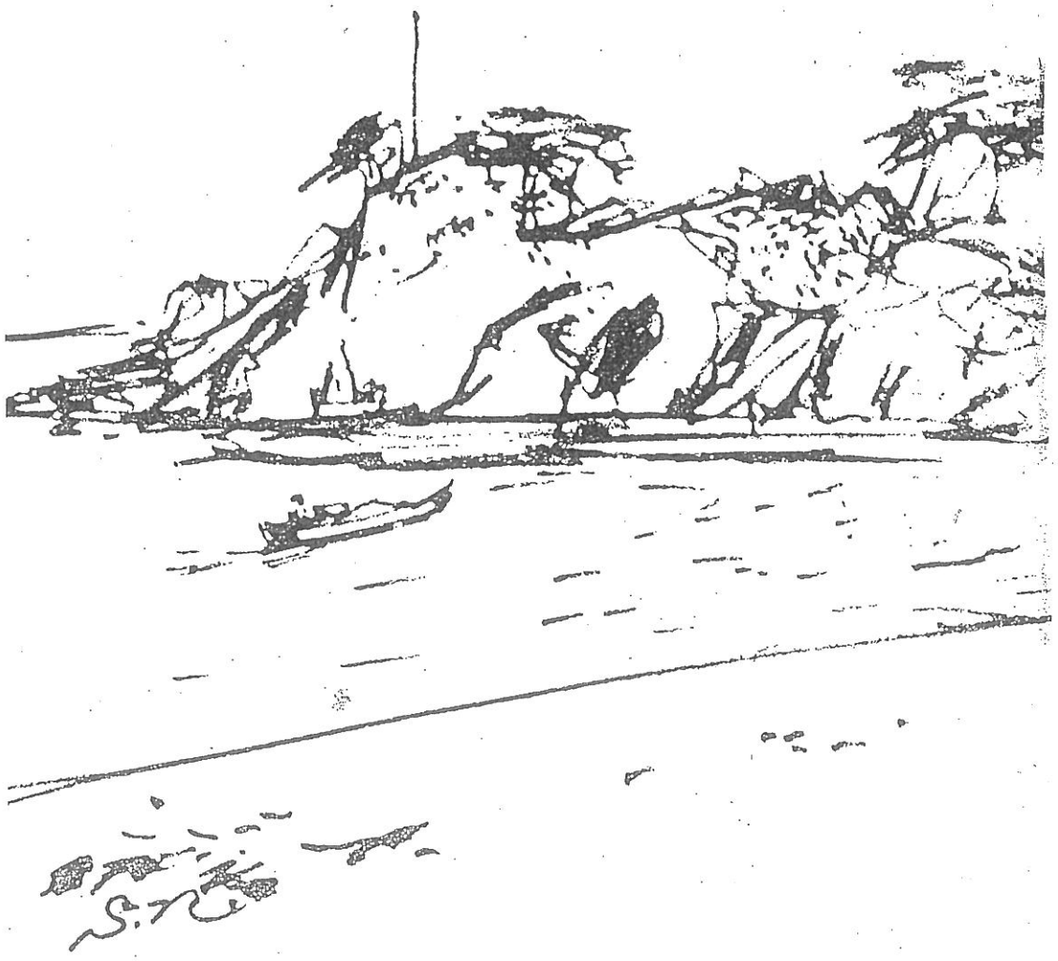
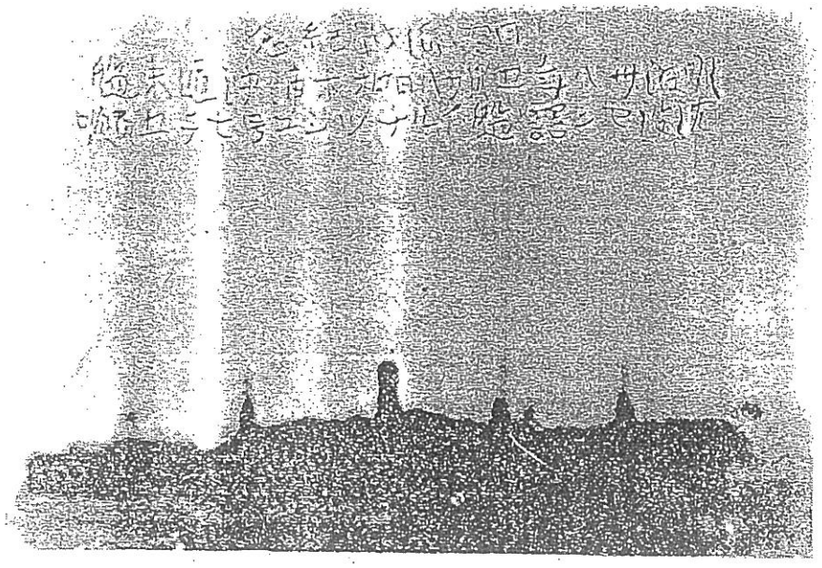
イルティッシュ号と和木



江津市立和木公民館

イルティッシュ号　最後の姿



明治38年５月28日午后２時　　森山善内氏撮影

序

島根新聞社編集局長　足立重雄

昭和三十四年八月二十九日、江津和木の海岸はイルティッシュ号の金塊引き揚げ作業がクライマックスに達していた。新聞、放送、雑誌などの報道陣がつめかけ、眼の色をかえて「日本に眠るロシア艦の金塊二百億円」が、海底から引き揚げられるのを待機していた。

一週間待ちぼうけをくった報道陣は、とうとう「金塊が揚がらないと、社に帰ることができない。なんでもいいから、引き揚げてほしい」という声さえ出た。

しかし、ヘリコプターやチャーター船が大挙出動して戦場のようなさわぎの中で、引き揚げられたものは金塊ではなくてボロボロになった綿火薬の箱であった。

×

あの当時の「黄金騒動」から早くも八年を経過した。悲喜劇ともいえるマスコミの金塊引き揚げ報道戦もいまはすっかり忘れ去られてしまったようだ。こんなさわぎは忘れられてもよいが、「イルティッシュ号の事件」だけは正しく伝えられ、歴史に残されなければならない。

今回、和木公民館の事業として「イルティッシュ号と和木」が刊行されることになった。明治三十八年五月二十八日、和木海岸に漂着来降した露艦イルティッシュ号の模様と、その乗組員、和木の人たちの崇高な隣人愛が六十余年間の年月のかべをとり払うように、真実の記録としてつづられている貴重な出版である。

本書の刊行に当たっては、記録の蒐集、編集等、なみなみならぬ努力、苦労が積まれていることであろうが、なによりも編集関係者の郷土愛、人間愛の精神が貫かれていることに深い感動を覚える。「イルティッシュ号と和木」は金塊引き揚げという余聞はあるが、欲望やナゾの追及といったものではなく、人間性、博愛の精神が脈打っていることに、一読ところの豊かになるのを覚えるものである。

昭和四十二年八月

序に代えて

江津市教育長　森脇義寛

和木の地は古い歴史と伝統の中から新しいものゝ生れ出ようとする息吹きの殊の外強く感ぜられる地である。長い和木地区の歴史の中でイルティッシュ号の来降事件は最も特筆すべき事件であった。

それは単にこの事件が、その当時の勝者が敗者に対し優越感を味わったとか、或は「よきあの時代を懐しむ」懐古趣味とか言う意味でなく、明治末期の鎖された草深い田舎の村和木の人々がはじめて世界と繋り、外国の人々と接触し、しかもそれは投降と言う異常な場面でのそれであっただけに、正に画期的な事件であり、日本的にも数少いと言うより唯一の事件であった。

その当時の村人達が驚きと不安と混乱の中で事の真相が判明してから示した、ほゝ笑ましくも涙ぐましい隣人愛の行動は何度聞いても胸の温まるものであり、後日談としての金塊引揚げの事は、たとえ金塊があるにせよ、ないにせよ、多分に小説的要素をも含んだ事件として私達の脳裡から去らない。

あれから星霜六十年、当時のことを知る人々も段々と少くなって行く世相の激しい移り変りは、だんだん当時のことを忘れさせ、当時を物語る記録や記念の品々も散佚しがちであることはこの上もなく淋しいことである。

こうした観点から和木地区の人達が公民館を中心に「イルティッシュ号と和木」を編集刊行されるに至ったことはまことに時宜を得たものとして、双手を挙げて賛意を表し、記録の蒐集、編集、刊行と物心両面に亘り、数々の苦労に打ち克った関係の方々の御努力に対し、心から敬意を捧げるものである。

この記録を正しく整理し保存し広く伝えることは、戦争を謳歌し、勝利を讃えることではなく、和木の長い歴史の中で和木の先人達の示した崇高な人類愛の気持ちや行動を後人達に残すことであり、今尚、和木の人々の心の中に生きている素朴で温いものを確かめることに外ならないし、激しい世の変遷は当時を偲ぶよすがもなくなるであろうこの渚、あの丘でかつて行われた劇的な事件を記録としてとめておくことは、遅しい近代化の道を急ぐ和木地区そのものゝ為にも極めて重要なことである。

この書が根幹となって更に詳しく正しい事件の記録が集大成されることを期待し、然るべき方の筆によって学童向けの郷土読本として書かれたものが出るなら私のこの上もない喜びとする所である。

かつて先輩達が巨費を投じて建設を企図した記念碑、記念館に代り、「イルティッシュ号と和木」が生れた。希くはこの書を繙く人々の一人一人の胸の中により大きく、より強い記念碑、記念館が建設されんことを。

昭和四十二年八月

刊行に当り

江津市立和木公民館
盆子原利郎

本書刊行は公民館の一つの大きな事業として多年の夢でありましたが、今回市教育委員会初め先輩各位の御協力に依り発刊の日を迎えた事を心から喜びます。

来降以来六十余年を経、現存の方々も年々減少し真実を伝える纏った資料もなく、昔語りになりつゝある当時郷土先輩の示した博愛の精神を永久に伝えたいと念願した次第であります。折りにふれ何らかの参考になれば幸せであります。

刊行に当りまして計画運営に物心両面より終始熱心に協力頂いた山田利夫市会副議長、編集を一任し熱心に御世話頂いた江面龍夫氏に心から感謝の意を表します。尚、当時唯一の貴重な資料として撮影された、故森山善内氏の遺品を貸与頂いた森山家、多年来降記念碑を建つべく努力された故和田源一氏の集められた資料に依る処が多く両家に対し心から御礼申し上げます。

昭和四十二年八月

目次

序文

第一章　イルティッシュ号の漂着……一

一、日本海海戦とイルティッシュ号……一

二、イルティッシュ号の漂着と投降……六

第二章　記念行事と記念事業の計画……一五

一、記念行事……一五

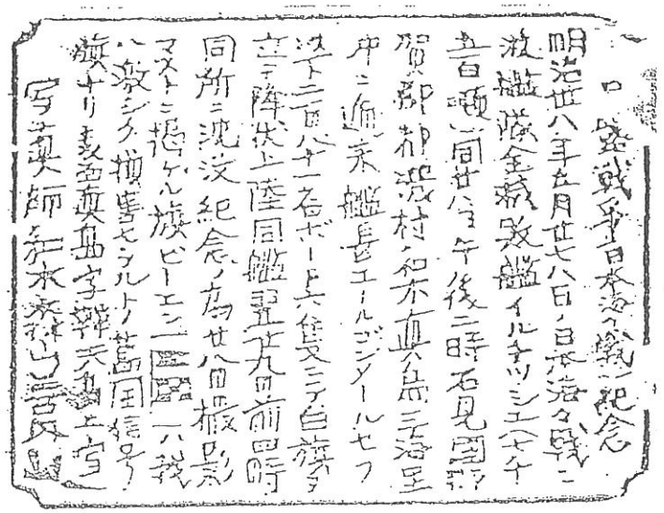
二、記念事業の計画……一六

第三章　イルティッシュ号後日譚……三三

一、金塊のナゾ……三三

二、金塊引揚げの夢……四二

あとがき……四七



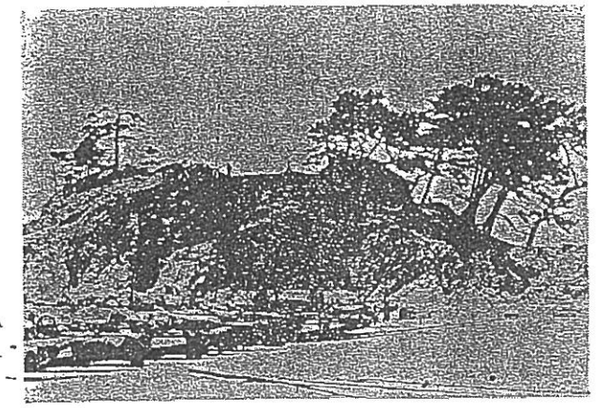
森山善内氏印刻

（明治38年イルティッシュ号投降当時）

明治38年5月28日　森山善内氏撮影

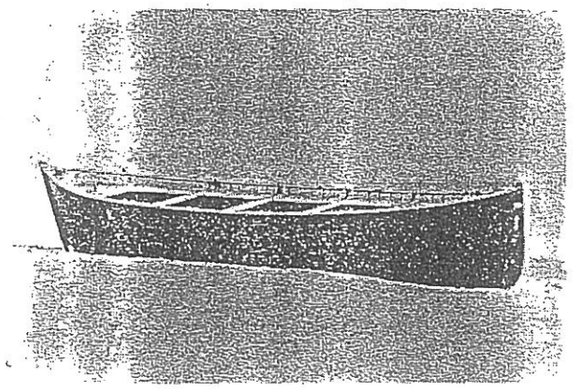
当時の真島

イルティッシュ号は、この真島沖二海里の海底に沈没している。



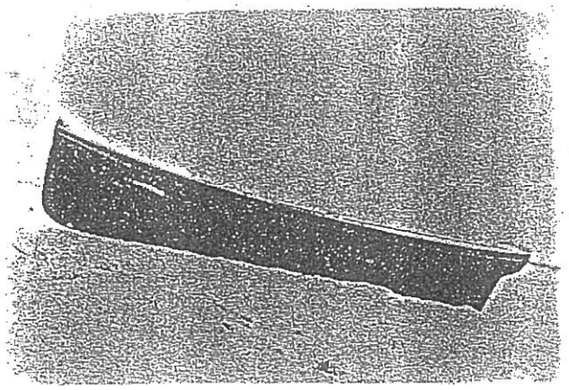
（森山善内氏撮影）

イルティッシュ号
投降時のボート（一）
十挺立「カッター」（艦長用）



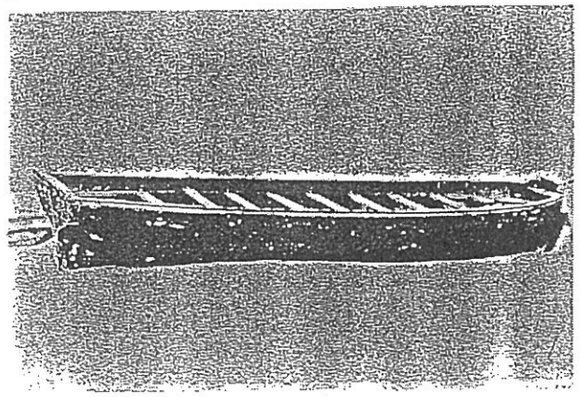
（森山善内氏撮影）

イルティッシュ号
投降時のボート（二）
中型カッター（士官用）
沖合（左上）にイルティッシュ号が、かすかに見える。



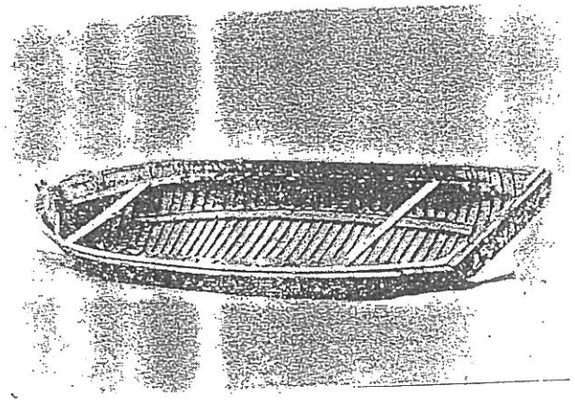
（森山善内氏撮影）

イルティッシュ号
投降時のボート（三）
十八挺立ランチ
露兵一名右端に見える



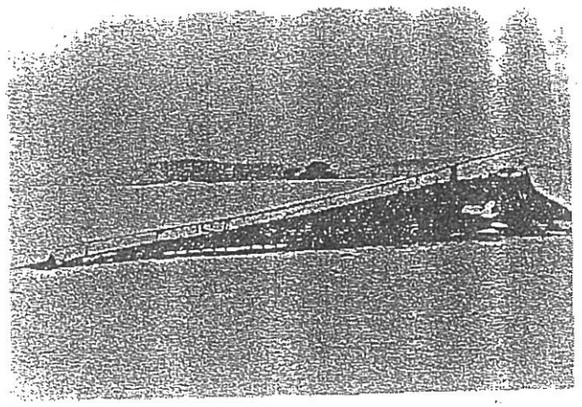
（森山善内氏撮影）

イルティッシュ号
投降時のボート（四）
十八挺立ランチ
（座席のとれたもの）



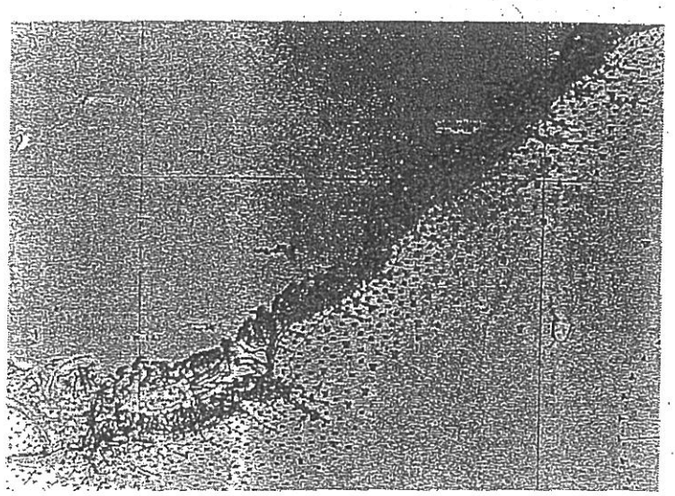
（森山善内氏撮影）

イルティッシュ号
投降時のボート（五）
大型ボート（ランチ）

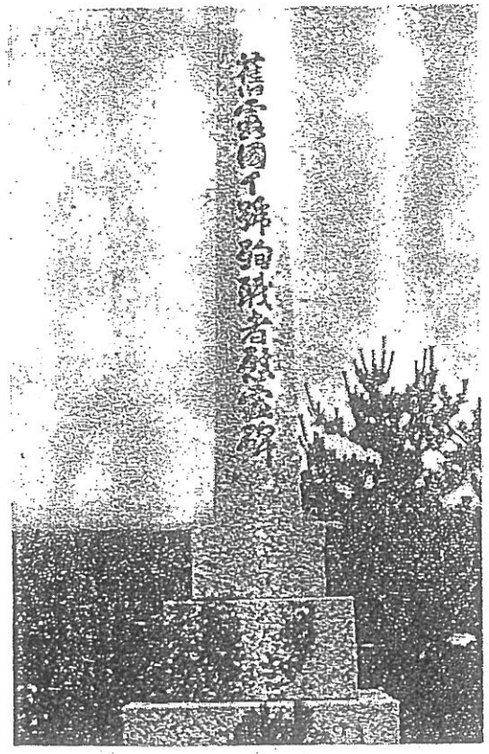


（森山善内氏撮影）

イルティッシュ号乗組将校の所持した海図



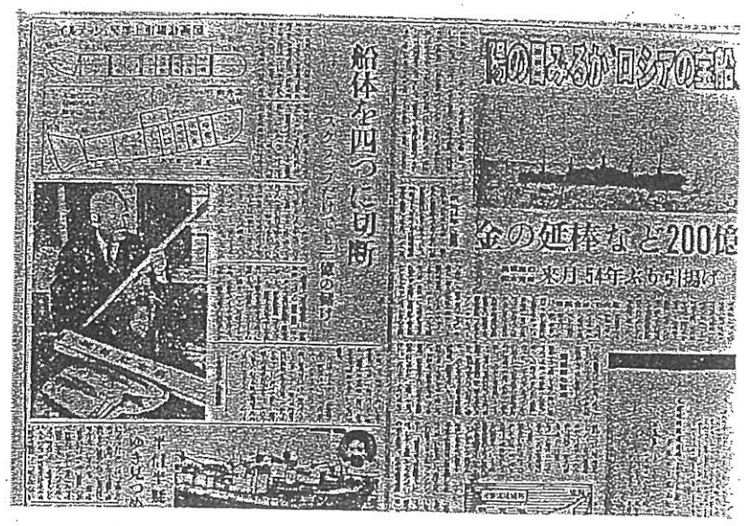
1886年ロンドンで刊行された日本近海の海図「江ノ川」
「江津」等海岸部の詳細な地名も記載されている。
（嘉久志　森脇ニチ氏蔵）



イルティッシュ号殉職者慰霊碑

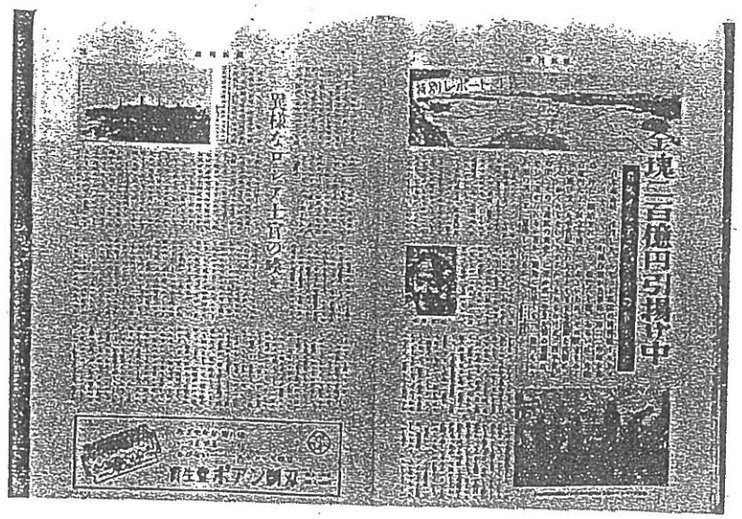
昭和三十四年六月イルティッシュ号解体引揚作業が本格的に行なわれた際、笹川良一氏によって真島附近の砂丘上に建てられた。

「イルティッシュ号引揚げ」記事



昭和34年２月22日「読売新聞」『ニュースパトロール』

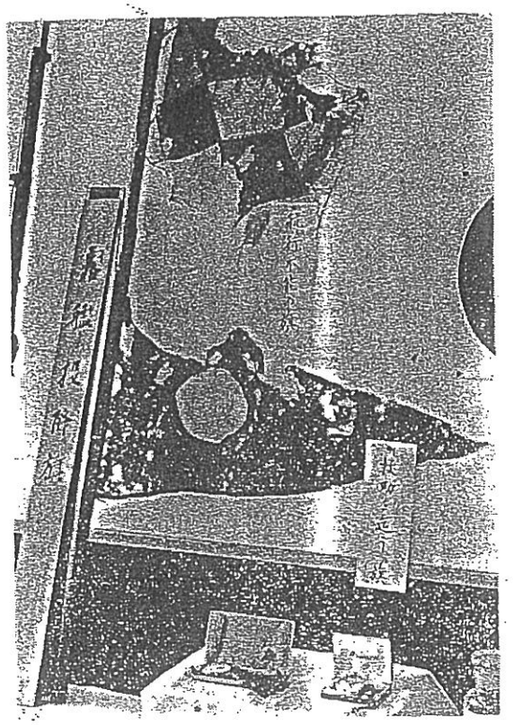
「金の延棒」を夢に『イルティッシュ号』引揚げに江津の町はわきたった。



『週間新潮』（昭和34年４月20日号）記事の一部

イルティッシュ号投降時の信号旗

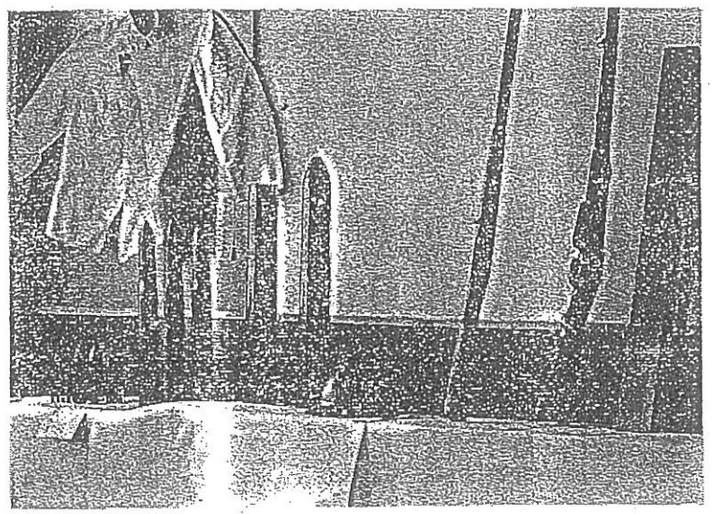
「B」（我ハ烈シク攻撃ヲ受ク＝航行不能）
「N」（救助ヲ乞ウ）



（和木小学校蔵）

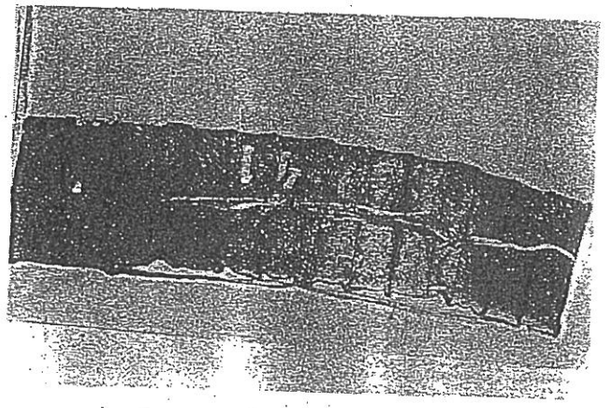
イルティッシュ号記念品（一）

右より　小銃、ヘルメット、砲弾、水兵服、銃弾

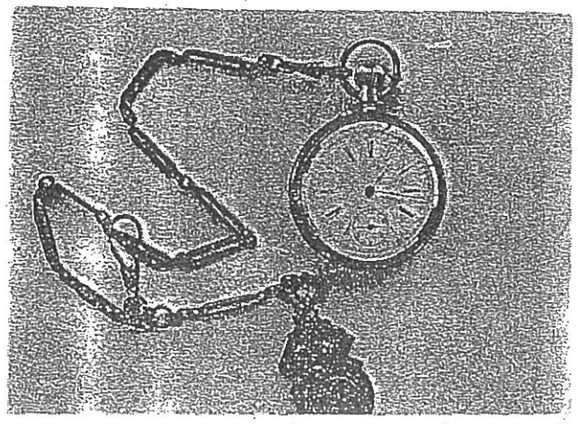


（和木小学校蔵）

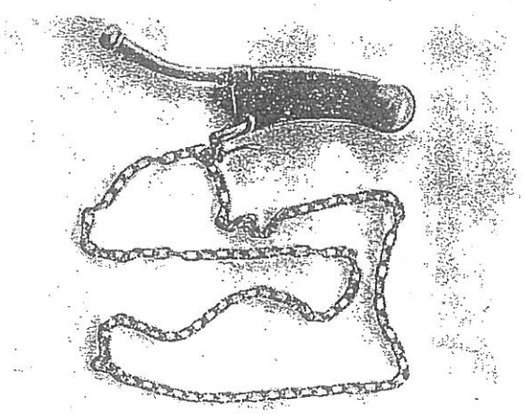
イルティッシュ号記念品（二）



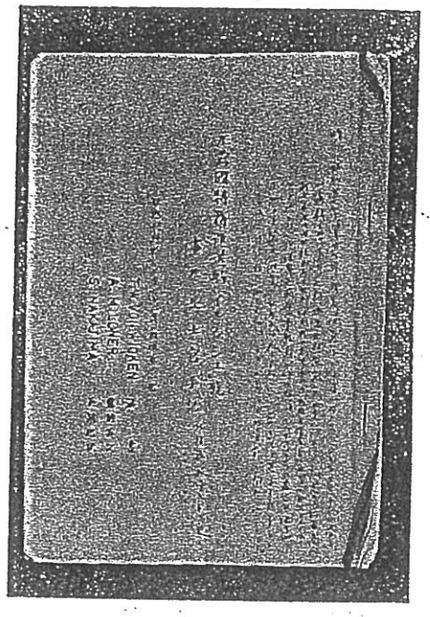
イルティッシュ号乗組員が
投降時着用した救命具



イルティッシュ号将校
所持の懐中時計

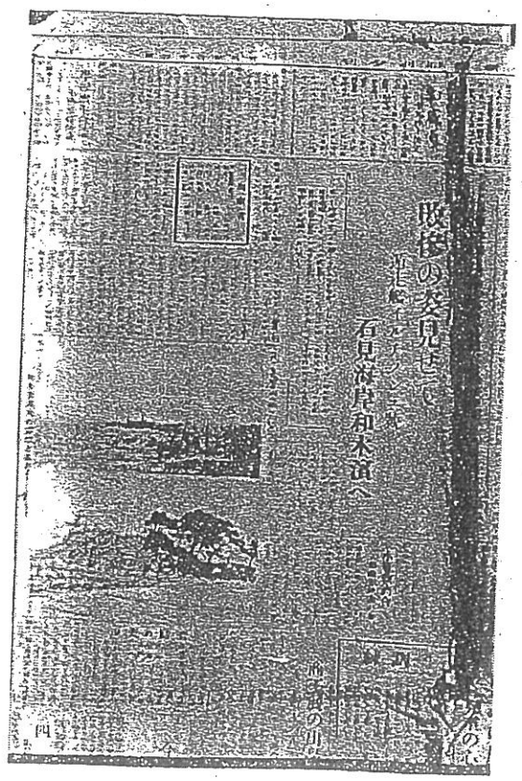


イルティッシュ号乗組
員の所持した号笛



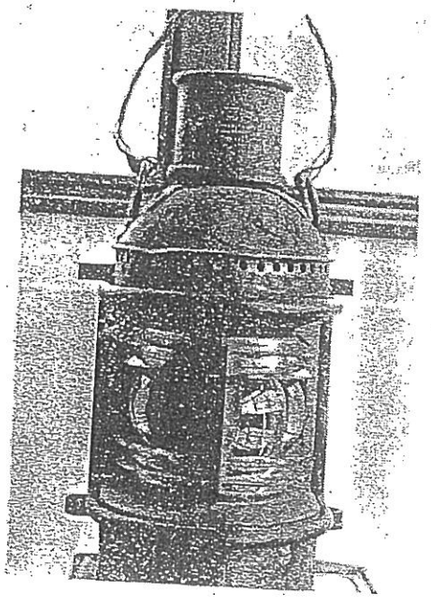
題のG.K.グラフ「手記」表紙
（和田氏蔵）

昭和16年石戸氏が台北放送局より台湾全島に放送した時のパンフレット

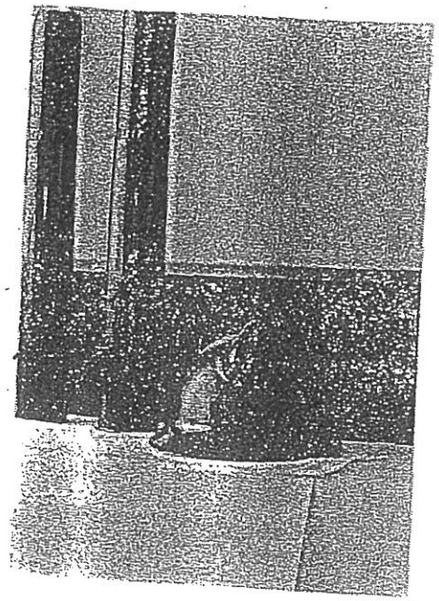


昭和十年五月十六日「福岡日々新聞」特別夕刊
「日本海大海戦記念座談会」の記事

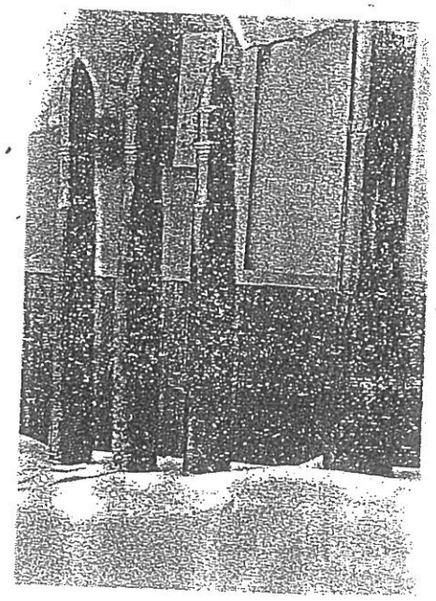
イルティッシュ号記念品 (三)



イルティッシュ号
引揚品　照明器

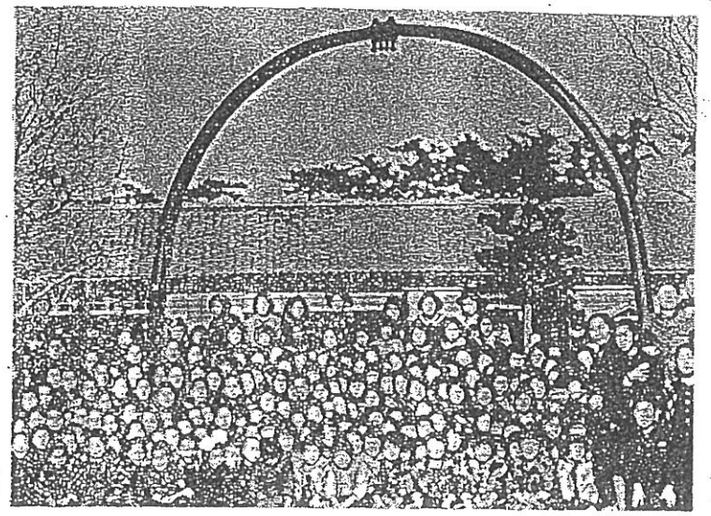


ヘルメットと砲弾



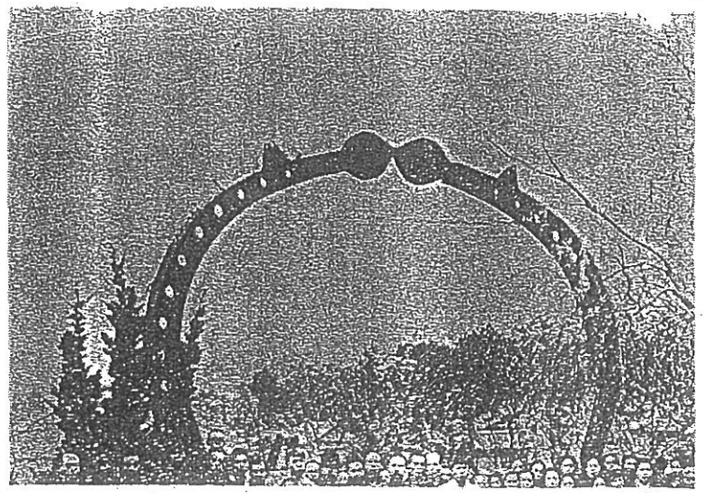
イルティッシュ号より
引き揚げられた砲弾

イルティッシュ号引揚品の校門



昭和18年１月14日午前10時半撮影（和木小学校校門）

太平洋戦争もいよいよはげしくなり、金属回収が全国的に展開された。30有７年の校門と訣れる感慨又一入である。



昭和18年　嘉久志小学校校門も応召した。（嘉久志小学校校門）

『イルティッシュ』号と和木

――イルティッシュ号の記録――

第一章　イルティッシュ号の漂着

一、日本海海戦とイルティッシュ号

明治三十八年（一九〇五）五月二十八日午後二時頃、西方サナメ岬の方から四本マストに一本煙突の巨船がヨタヨタと和木の海岸に近づいてきた。

この日、空は晴れていたが朝から西の風がはげしく吹きまくり、真島の岩壁には激浪が逆巻いていた。浦の漁師たちは午睡をとる時間であったが、ちょうど日曜日のこととて子供達は海辺の松原で松の枝から枝へ棒を渡して逆上りなどをして遊んでいた。昨二十七日は対馬沖で前古未曽有の大海戦が行なわれ、わが東郷司令長官のひきいる連合艦隊はロシアの誇るバルチック艦隊を撃滅し、今日もひきつゞきその掃蕩作戦が展開されているさ中であったが、交通通信機関の至って貧弱な当時、新聞をとっている家も僅かに一軒に過ぎず、それも三日も遅れて松江から配達されるという状態であったから、昨日午後からの遠雷のような響は浦人たちに無気味な不安を感じさせてはいたものゝ、それが日本海の大海戦であったとは知る由もなかった。だから突如としてあらわれた四本マストの巨船がロシアの軍艦であったと知った時、村人たちはいい知れぬ恐怖と

興奮にわきたった。大人も子供も婦女子に至るまで手に手にあり合わせの農具や棒をもって浜辺に集まった。伝え聞いた近隣の村々からも珍しいもの見たさから多数の見物人が押し寄せ、平和な漁村和木の部落も一朝にして興奮と雑踏の巷と化したのである。これが「日本海海戦と和木」の主役をなすイルティッシュ号漂着の際の情景であった。しばらく『元露国特務運送船「イルティッシュ」号事務長士官手記』によってイルティッシュ号の航跡をたどってみよう。（但し日付けは『聖将東郷と霊艦三笠』によって日本時に修正した。）

明治三十七年（一九〇四）二月十日わが国はロシアに対し宣戦を布告したが、それに先だつ二日前の八日にはわが艦隊はすでに仁川沖でロシア艦隊を攻撃していた。さらに十四日にはわが先遣駆逐艦隊は旅順港に奇襲攻撃を加え多大な打撃を与えたが、進んで旅順港口を閉鎖するため、二月二十四日第一回の作戦を開始し、つゞいて三月二十七日には広瀬中佐らの決死の閉鎖作戦が行なわれ、五月二日の第三回作戦によって旅順港内のロシア極東艦隊は完全に行動の自由を失なった。こうしてわが作戦は有利に展開し五月五日には陸軍の第二軍が遼東半島上陸に成功した。

このような極東の情勢に対しロシアの作戦本部では、新たにバルチック艦隊をもって第二太平洋艦隊を編成し、ロジェストウェンスキー中将を司令長官に任じ、明治三十七年十月十五日、リバウ港を出航させることゝした。イルティッシュ号も第二太平洋艦隊の運送船としてそれに加えられた。イルティッシュ号は日露開戦直後ドイツより購入された貨物船であるが、リバウ港で艤装され軍用運送船に改造された四本マストに一本煙突、二千トン積のハッチ五個を装備した七千五百トンの最優秀運送船であった。九月初旬艤装を終えたイルティッシュ号は他のバルチック艦

隊と共にロシア皇帝の親閲を受けるためレベル港に回送されたが、途中ナングル島付近で坐礁し船体に損傷を受けたため、親閲後再びリバウ港で修理することゝなった。修理には約二カ月半を要した。

十二月も終りに近づいたクリスマスの二三日前、イルティッシュ号は「ポートサイドに直航しそこよりスエズ運河を経てジプティ港で待機せよ」という命令を受けた。先発の本隊はすでにアフリカの南端を迂回しマダガスカルに着いていた。

イルティッシュ号は少量の石炭と水兵靴一万二千足を積み込み、リバウ港を出航し、北海—ドウバ海峡—ジブラルタル—地中海—ポートサイド—スエズ運河を経てジプティ港に入りマダガスカルの本隊に連絡をとった。本隊からは折りかえし「次の命令あるまでそこで待機せよ」との指令を受けた。本隊はすでに十月二十九日にマダガスカル島に到着していたが、当時の国際情勢とくに日英同盟などの関係から穏密裡に行動しなければならなかった。はるかアフリカの南端を迂回し、マダガスカル島という辺鄙な地に投錨しなければならなかったのもそのためであった。しかし、そうしたことから食料品の積み込みなどに意外の日時を費し、約二カ月半おくれて本国を出発したイルティッシュ号が予定のジプティ港についた時もまだマダガスカルに碇泊していたのであった。

三十八年一月も終ろうとするころ本隊よりイルティッシュ号に「ジプティ港を即刻出帆して本艦隊に合せよ」との司令官命令が出た。イルティッシュ号が南への航路をとり赤道をこえてマダガスカルに到着した時、本隊はすでにシノベ港に向かっていた。イルティッシュ号は再び北に進

路をとりマダガスカル北方のシノベ港に到着し本隊に合流して、早速食料品其の他の積み込みに多忙な数日を費した。

三月十六日、第二太平洋艦隊四十五隻はシノベ港を出帆し四月五日マラッカ海峡通過、八日にはシンガポール沖を通り、十三日仏領インドシナ（現在の南ベトナム）のカムラン湾に入った。こゝでイルティッシュ号は種々の荷物の積み込みに約十日間多忙な日が続いた。つまり総勢四十五隻の本隊の中には多数の小運送船が含まれていたが、それらからすべての戦時用品がイルティッシュ号とアナヂル号に積みかえられたのである。イルティッシュ号は八百の水雷と多量の水雷網と多くの酸類を積み込み、さらに本国より持参した海軍信用小切手をすべて金貨に換えた。ロシア艦隊の予定ではこのカムラン湾が最後の碇泊地であった。ところがフランス官憲は国際政治の配慮からロシア艦隊のカムラン湾即時退去を要求してきた。そこでロシア艦隊は予定を変更し五月九日、カムランの北方一日航程のヴァン・フォンという寒村に移動しなければならなくなった。こゝでまたイルティッシュ号とアナヂル号は全艦隊がウラジオストックへ到着するに必要なだけのあらゆる軍需物資を他の小運送船から積み込んだ。とくにイルティッシュ号は全艦隊の使用するあらゆる種類の砲弾で前部のハッチは完全に満たされた。さらに三千二百プード（一プードは一二八、〇〇〇ポンド）のピロキシン、無数の乾湿綿火薬砲弾を積み込み、まさに全軍の貴重な倉庫としての地位についたのである。

間もなくネボカトフ少将のひきいる第三艦隊がヴァン・フォンに到着した。こゝに全艦隊五十隻は勢揃いし五月十四日ヴァン・フォンを出港し一路ウラジオストック目ざして北方への進路を

とった。五月二十日バタン沖を通過、二十三日にはすべての軍艦は石炭運送船から石炭を積みとり、任務を終えた運送船は本国へ帰航させられた。この日オスラビア号に乗っていた第二戦隊司令官フェルケルサム少将が病歿したが、士気の沮喪を恐れついに発表されなかった。二十五日、これまで行動を共にした残りの運送船の物資は各艦に移され、運送船はイルティッシュ号、アナヂル号のほか計六隻を残して他は全部本国へ帰された。

この日から三十八隻となったロシア艦隊は実戦陣形をもって北進することゝなった。すなわち先頭に数隻の偵察艦隊を配し、その後に三列の縦隊をつくった。右端は旗艦スワロフ号に乗ったロジェストウェンスキー提督の率いる一隊、中央部はイルティッシュ号などの特務艦隊、左端はニコライ一世号に乗ったネボカトフ提督の一隊とオレーグ号の一隊が続いた。最後部に約十海里離れて病院船が続き、その陣形は実に数哩の長さに達した。

五月二十七日午前四時四十五分、わが哨艦信濃丸は濃霧の中に敵艦影を認め、「敵艦見ゆ。敵は東水道に向うものゝ如し」と連合艦隊旗艦三笠に打電した。そのころロシア艦隊の病院船アリヨール号もまた一隻の日本艦影を認めロジェストウェンスキー提督に報告した。それが信濃丸であった。午前六時、ウラル号とスワロフ号は、はるかに日本艦隊影を認め、また七時ではイルティッシュ号も一隻の日本軍艦を水平線のかなたに認めた。午前十時、北進するロシア艦隊の東方に四隻の日本艦隊があらわれた。このような日本艦隊の出没に恐々としたロシア艦隊は、対馬海峡に接近した午前十一時二十分、はるか彼方に認めた日本艦隊に対し一斉に砲門を開いたが、日本艦隊は未だ沈黙を守り続けてこれに応じなかった。

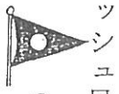
正午ロシア艦隊は壱岐の若宮島北方十二海里の地点にさしかゝり、北東に進路をとることが明らかになると、東郷司令長官は全軍に対し戦斗準備を命じ、午後一時三十九分、ついに全艦隊待望の「戦斗開始」の命が下された。一時四十分、旗艦三笠の檣頭高く歴史的なZ旗が掲げられ、こゝに前古未曽有の日本海大海戦の火ぶたがきられたのである。

午後二時二十分、まずオスラビア号から黒煙が噴き出し、間もなく大火災をおこし沈没していった。つゞいてスワロフ号の撃沈、アレクサンドル三世号も大火災をおこし、イルティッシュ号の近くにも無数の砲弾が炸裂した。イルティッシュ号は多量のピロキシンその他の可燃性物質と大量の砲弾を満載していたので、わが砲弾を避けるに懸命の努力をはらわねばならなかった。そのうち本隊を失ない、わが瓜生艦隊に追撃され、ついに第一弾は第二ハッチの右側に、第二弾は甲板上の社交室に、第三弾は艦の前方に命中した。午後七時ごろイルティッシュ号の近くにあったカムチャカ号から火を噴き出し、ついに沈没、アナヂル号は南方へ遁走し、唯一隻イルティッシュ号がわが砲撃にさらされることゝなった。

このころイルティッシュ号はすでに数個の砲弾を受け浸水はなはだしく、もはや完全にその機能は停止の状態にあった。やがで夕陽も沈もうとする頃、イルティッシュ号のエルゴムイセフ艦長は全員を集めて最後の協議をした。その結果なるべく日本の陸岸近く北行しながらウラジオストックに逃げこもうと、進路を北東にとり日本海岸目ざして航行を続けることゝなった。

二、イルティッシュ号の漂着と投降

イルティッシュ号は水線下に砲弾による損傷を受けて浸水はなはだしく、いまや沈没はたゞ時間の問題であった。二十八日午前十時頃一旦江川尻沖合まで近づいたが、そこで急に方向を転じ西に向い、川波村のサナメ岬を目ざして進むようであった。しかし、やがて再び大きく東に転回して午後二時頃和木の真島沖二海里の所まで接近した。

そのころイルティッシュ号は「既ニ一分ヲモ待テヌ危険が身ニ迫ッテ来タ」。艦長もついに意を決してB N  の信号旗（B＝我ハ烈シク攻撃ヲ受ク、N＝救助ヲ乞フ）を掲げ艦首を陸に向けて碇をおろさせ、乗組員をそれぞれ六隻のボートに分乗させ投降の準備を命じた。

（『元露国特務運送船「イルティッシュ」号事務長士官手記』：以下『手記』と記す）

この日の状況を当時の目撃者故和田源一氏は次のように語っている。

（昭和十三年五月十六日『福岡日々新聞』特別夕刊連載「座談会」記録）

「五月二十七日は土曜日でありましたが当時、私は江津尋常高等小学校の高等科四学年で十四才の時でありました。二十七日の午後からドーン、ドーンと云う音がして硝子障子に響くのでありました。何だろうと不思議に思って居りましたが、後に至って夫れは日本海大海戦の為めだと云う事が判りました。今にして思うと当時は新聞も読む人も尠く、又交通通信機関が至って不備であった為め日本海海戦があったかどうか知らなかったのでありました。」

「翌日の日曜日は晴れて居ったが、ウットリと霞んで西の風が強烈に吹き荒んで居りました。……私達は日曜日のことでありますから、私の家の前の松原の松の枝から枝に棒を渡して尻上りをして遊んで居りました。フト見ると遙かの沖合に大きな船が近寄って参ります。吾々餓鬼大将数名が『ヤァ大きな船がやって来

たぞ、汽船だろうか』と云っている内に真島の沖合に錨を卸した。そうかうする間に浦の人が皆浜辺に出て来た。滑稽なことは、皆口々に知ったか振りをやって居る。『あれは何だらう』『何でも郵船会社の船らしいぞ』『イヤ一本の煙突が黄色く塗ってあるから病院船だらう。大方水でも積みに上って来るのだらう』、と噂とりどりでありました。夫れでもまだロシアの軍艦だなどとは気がつかなかったのでありました。

「夫れから一段高い真島の上に駆け上って見ますると船からボートを卸しました。之より先、参謀本部からの通牒に依って江津警察署分署から真島の上に展望哨が警戒に立って居りまして、双眼鏡を出して見て居りましたが、其内『あれはロシアの旗印だ』と叫んだものが居りましたので、双眼鏡を手に取って見ますと果してロシアの旗だ。『ああロシアの軍艦が攻めて来たぞ』と云ふ騒ぎで警官は『お前達女子供は山の方へ逃げてしまへ』と命じましたが、一人の巡査に幾百千の群集で容易に制しきれない。恐怖心もあったが又好奇心も強かったのでなかなか去らうとしない。其の中に船からは円い物を盛んに投下ろし本艦から離れたボートは六隻で陸に向って漕ぎ出した。夫れには何れも白い褌のやうなものを掲げて居たので、初めて降参したものだと云ふことをさとり、日本海々戦であったことが判りました。」（原文のまゝ。以下同じ）

白旗を掲げ救助を求めるロシア兵であることが判り、浦人たちもやゝ安堵の胸をなでおろしはしたものゝ、一時は婦女子を星高山方面へ避難させるなど、その狼狽と混乱は一通りではなかった。

イルティッシュ号の乗組員はそれぞれ救命具を身につけ六隻のボートに分乗し海岸目ざして漕ぎ出したが、「途中ニ海水ノ渦巻キヲ見タケレドモ誰モソレヲ避ケ様ト注意ヌル者モナカッタ」（『手記』）ほど疲労困ぱいその極に達していた。午後四時ごろ先頭の二隻のボートが海岸に接近した。「上陸したら殺されるのではないか」という不安からか、しばらく陸上の様子をうかゞ

っているようであったが、やがて彼らは持っていたピストル、銃剣その他武器らしいものはドンドン海中に投げ棄て、救助を救める動作を示した。そして

「沖から見れば入江のやうになっている真島を目標に、ボートを漕いで近寄って来ました。処が西の烈風に煽られて、三百メートルも東の方に吹きつけられました。磯へ着けようとしても激浪の為め屢々海へ押流され」

激浪に巻きこまれて容易に上陸出来そうになかった。その時

「代用教員をして居った木島泰次郎と云う人が：真っ先に着物を脱いで海中に立ち、沖の方に向って両手を指し挙げ声を限りに『此方へ来い〳〵』と招いて居た如き涙ぐましい場面を見せ、群集をして痛く感動させた。」

こゝに和木の浦人たちは

「期せずして勇敢にも男子は素っ裸となって海中に飛込みボートを引っ張って陸に着け、婦女子は裾をまくって露兵の手を取り悉く上陸せしめたのでありました。」

負傷兵をあわせて全員二百六十五名と、所持した荷物の全部を上陸させることができたのは、すでに午後六時を過ぎていた。昨日の敵に対しても何らの隔てもない、恩讐を超えた人類愛の発露ともいえるこの美しい行為は、イルティッシュ号乗組員の一人一人が、「日本人は誰も彼も親切にして呉れて非常に嬉しい」と感激の涙を流し、中には合掌して感謝の意をあらわすものもあったという。

上陸を終えたイルティッシュ号乗組員は、「直チニ負傷兵ヲ砂ノ上ニ横タエ、赤十字ノ旗ヲ楫

ノ先ニ結ビツケ砂ノ上ニ突キ立テタ。ソシテ我々ハ人々ニ対シ何一ツ武器ヲ持ツテ居ナイト云フ事ヲ示シタ。」（『手記』）

しばらくして警官が人員を点呼し、とりあえず砂浜にボートのオールを円形に立てゝ縄をはりその中に收容した。

捕虜となったイルティッシュ号乗組員は

艦長　中佐　コンスタンチン・リウォーウィッチ・エルゴムィセフ
副艦長　中佐　イワン・ニコライウィッチ・マガクンスキー
大尉　ウラジミール・パウロウィッチ・ルオヂャニン
仝　アリフレール・ツエサデウィッチ・ミュンステル
右相当官機開士　アレキセー・ピョートルウイッチ・パラドーフスキー
仝　グリゴーリ・ニコライウィッチ・アラブスゼンコーウィッチ
中尉　エフゲーニ・コンスタンチノーフ・エーメリヤノフ
少尉　ユーリイ・ミハイロウィッチ・ペツフオーク
仝　バリスドミー・テリウィッチ・コズサコーフスキー
仝　アリフレール・ゲルマノーウイッチ・カッチエルヘーリル
仝　ゲルベールト・エルネトーロウィッチ・ギリビーフル
仝　ニカライ・ニカライウィッチ・シーシュキン
仝　イワン・クリユリエウィッチ・ソロキン
右相当官機関士　アナートリ・イワノーウィッチ・ガルビン

仝　アレキサンドル・レオンチウィッチ・パラベーンコ
仝　イワン・アンドリヤノーウィッチ・ノウィッチ
事務長　ガラーリル・カールロウィッチ・グラフ
医師　ヨーフルク・ヨレーオウィッチ・テラワーリ

ほか高等文官を含め将校二十二名、准士官六名、下士官三十三名、兵二百三名計二百六十五名であった。（『和木小学校沿革誌』）海岸に収容されたこれら乗組員たちは、半年に及ぶ長い航海の疲れと、昨日から今日一日にわたる激戦と遁走、そして捕虜という、あまりにもあわたゞしい変化に、今は全く身心ともに虚脱されたようにたゞ呆然として。「士官モ船員モ共ニ海岸ノ砂ノ上ニ座ツテ『イルティッシュ』号ヲ眺メ」ているのみであった。（『手記』）また、彼らの中には重傷者十三名軽傷者十五名があったが、中でも顎を打ち砕かれ滴る血潮を片手で押さえながら健気にも負傷者の手当てに当っている軍医の姿や、両脚を切断されてうめき苦しむ重傷者の姿など、はじめは遠まきにして好奇の眼をもって眺めていた人々も、次第に深い同情の念を催おし一人二人と彼らに近づいていった。捕虜たちも懐中時計や食料品などを人々に示し、歓心を買おうとした。しかし、素朴な浦人にちにはなお一抹の不信感は消えなかった。

「捕虜は吾々に歓心を買はうと思って色んな物を呉れます。パンの切や缶詰、砲弾形の真っ白い固まり、夫はなかなか堅い。毀して食て見ると砂糖だ。そこで吾々餓鬼大将は奪い合ひをすると傍から、『お前方夫を食るぢやない。皆毒が仕込んであるから食べると朝迄に死んでしまふ』と云ふので、子供の事だから夫を恐れてもう奪合をやめると云ふやうなこともありました。」（『福岡日々新聞』「座談会」）

昭和十五年五月二十六日、台北ラヂオ放送局を通じ和木出身の石戸重頼氏は『露艦イルティッシュ号の最後を語る』と題して、全台湾に放送された中で、「ロシア自慢の氷砂糖の枕以上もある、でっかい塊を貰って、毒があるから食べてはいけないと云ふものがあるかと思へば、中には洗って食べたら非常に美味しかった等、また樽入りのウィスキトを貰って開けて見ると、迚も素晴らしい香りはするが、匂ひで引付ける毒酒だと云って、飲む人はなかった。」など、笑えぬナンセンスが後まで語り草となったとのべているが、いかにも素朴な当時の浦人たちの心情をよく表わしている。

一方傷ついたイルティッシュ号はしばらく真島のはるか沖合に浮揚していたが、全員上陸を見とどけ、今はすべての任務を終ったかのように、「急ニ船ノ姿ガ低クナツタト思フト次第ニ船首ノ方ガ水ノ中ニ這入ッテ行ッタ。船体ハ船首カラ先ニズット皆水中ニ没シタガ暫クノ間ハ煙筒モ檣モ水面上ニ見エテ居タ。」（『手記』）イルティッシュ号乗組員たちは、

「銘々ポケットから写真を取り出し、夕陽と共に沈み行く艦と見比べては沈痛の色を面上に漂はせ、幾たびか溜息を漏らすのであった。私は子供心にも戦敗者の身は実に情ないものだと云ふことを深く感じたのでありました。」

と故和田源一氏は当時を回想して感慨深く語っている。

イルティッシュ号は翌二十九日午前二時頃ついにその姿を完全に水面下に隠してしまった。これについてイルティッシュ号の事務長G・K・グラフは

「『イルティッシュ』号が沈没シタト云フ事ハ、我々ニ非常ナ悲シミト落胆トヲ与ヘタケレドモ、同時ニ

又我々ハ沢山ノ積載物ヲ持ッタ儘、若シ二三日モ海上ニ浮ンデ居テ日本軍ニ他ノ港ヘデモ引キ行カレルカモ知レヌト云フ心配カラハ完全ニ解放サレタノデアル。『イルティッシュ』号ノ沈没ハ悲シイ事デハアツタガ又安心シタ。今ヤ『イルティッシュ』号ハ此ノ世界カラ永久ニ失ハレタ。何者ガ能ク此ノ『イルティッシュ』号ヲ再ビ海面ニ持チ来リ得ベキモノカ。」

とその『手記』を結んだ。

これより先、イルティッシュ号が和木の真島沖に接近しつゝあることは直ちに江津郵便局を通じて浜田の歩兵第二十一連隊に通報された。当時浜田連隊は満洲に出動中で留守部隊は補充兵一個大隊に過ぎず、しかも当日はちょうど日曜日のことゝて大部分が外出していた時であるから、「敵兵和木海岸に上陸」の報は、留守部隊に大きな衝撃を与えた。直ちに非常呼集を行ない、一個中隊の戦時編成をもって山田少佐指揮のもとに駈足で和木の現場へ向うことになった。途中波子のあたりでイルティッシュ号の投降を知って一部を帰営させ、一個小隊をもって現場に到着したのはその日も午後七時を過ぎる頃であった。

陸軍部隊の到着後直ちに憲兵隊、警官、郡役所役人ら立会の上、午後八時頃捕虜全員は浜田部隊に引き継がれ、その夜は将校は嘉久志の森脇久五郎氏宅へ、重傷者を含む負傷者を主とした八十三名が和木小学校へ、残り全員は嘉久志の小学校へ収容された。和木小学校に収容された負傷者に対しては、衛戍病院から派遣された軍医二名と四、五人の看護兵が夜を徹して傷の手当てにあたった。また、海岸に留置された捕虜の所持品は、地元民の徹宵警戒のもとに厳重に保管された。

こえて翌二十九日、負傷者及び荷物は和木浦より漁船七隻で浜田へ、歩行可能な者は軍隊護衛のもと陸路浜田へ送られた。この時の目撃者の一人は

先頭に人力車が五台、負傷者らしき者と見受けられた。次の一隊の前列には露兵の将校らしき者が二人居り、其の二人の中に浜田の留守隊長らしき将校が抜刀して居られたが、露兵の腋の下迄しかなく、子供心にも露兵の身長は高いなと感じました。其後四列で毛布を巻いて肩にかけて居る者、水筒を提げて居る者、中には帽子のエンビを後向にかむって居るやら実にだらしなく見受けました。全員百八十人位であったと思いました。其後から二十一連隊の軍人が着剣のまゝ百五十人位列を正して国道を浜田に向いました。

（渡津町、佐田尾要氏記＝当時国府町上府住、原文一部訂正）

と語っている。浜田では約一カ月間軍隊の厳重な警戒のもとに真光寺などに監禁されていたがその後全員道後の捕虜収容所に移された。

第二章　記念行事と記念事業の計画

一、記念行事

「昔から、それは明治の三十九年頃から始ったものか。五月二十八日はロシヤ祭と称して午前中は小学校で運動会を催し、午後は持寄りの肴で懇親会をするということが和木地区の習慣になっていた。五月二十八日は明治三十八年の此の日、和木浦へ露艦イルティッシュ号が投降した日であり、又その頃は旧暦端午の節句にあたるので全村挙って祝ったものであろう。終戦後この日を下して小学校の運動会に制定しようと考えたとき、知人から注意されたことは〝国際情勢が変ったのだから遠慮したがよいのではないか〟と云うことであった。時、たまたま学校の沿革誌をひもどいてみると、露兵の上陸にあたっては風浪高く頗る危険であったが婦女子まで腰巻一つになり海中に飛込んで敵の将兵を救助したという記事を発見し、これこそ世界に顕揚すべき国際美談であり、この日を年中行事に決めることの有意義であることを信じ古老に相談して賛意を得、爾来この日を小学校の運動会にきめて逐年その盛会を期することが出来た。」

これは『和木の生成と展開』にのせた石橋義喜校長の「緒言」の巻頭の言葉であるが、ロシア祭の意義についてこれ以上つけ加える必要はない。一日遅れての海軍記念に往時は記念式、記念講話、記念品の陣列、そして小学校々庭での部落をあげての運動会、懇親会に往年を回想することが和木地区の年中行事となっていた。時は移り人も変り世の中も変って来た。しかし今もなお

この日、和木小学校々庭では学童の運動会が催され、五月の薫風に腹をふくらませた鯉のぼりが空高く舞い上っている。和木地区のロシア祭は新しい意義をもってこれからも永遠に生き続けて行くことであろう。

二、記念事業の計画

イルティッシュ号乗組員の上陸用ボートのうち三隻は浜田連隊、浜田中学校および和木小学にそれぞれ保管された。浜田連隊営庭に保管されたものには、

第二十一聯隊所蔵露艇之記

明治三十八年五月廿七日露国精ヲ集メ鋭ヲ尽シタル第二艦隊ハ海ヲ蔽フテ対馬海峡ニ迫ル我艦隊ハ敵ヲ迎撃シテ大ニ之ヲ破リ全滅ニ至ラシム

敵艦イルチッシュモ亦我巨弾ヲ被ルコト三個ニ及ビ到底闘フベカラザルヲ知リ逃レテ那賀郡都濃村沖ニ来リ翌廿八日全ク進退ノ自由ヲ失ヒ覆没ノ悲運ニ陥ラントス爰ニ於テ乗員武器ヲ海ニ投シ端艇ニ転シ白旗ヲ掲ケテ上陸セントスレバ怒濤澎湃敵艇ヲ呑マントス村民傍観スルニ忍ビズ数艇ノ漁舟ヲ艤シ狂瀾ヲ冒シテ努力シ敵艇ヲ死地ヨリ救ヘリ先是我歩兵第二十一聯隊補充大隊長敵艦来ルノ報ニ接シ一中隊ヲ派遣シテ急ニ応セシム該中隊現場ニ臨ムヤ敵兵直ニ降伏シ将校以下二百四十七名ヲ算セリ此ノ艇ハ即チ敵兵上陸ノ際乗用セシモノナリ

（『島根評論』通巻百四十一号、昭和十一年六月二十日）

と説明がつけられていた。その他ボート釣二組（後に小学校々門に使用）信号旗（B・N）、小銃、砲弾、ヘルメット、照明器その他多数が小学校および一般民家に所蔵された。これらの記

念品は、

明治四十年五月三十一日この露艦引揚品を校舎の敷地に陳列して大正天皇が東宮殿下として山陰行啓の際御台覧に供し奉った。

（山陰新聞　昭和九年五月二十八日）

この時　松永島根県知事はイルティッシュ号投降時の模様を審さに御説明申し上げ。また、殿下の随員としてこの記念品を一入感慨深く観覧された東郷平八郎海軍大将は、和木小学校玄関前にとくに「楠」の記念植樹をされた。さらに昭和八年八月十九日、澄宮殿下（三笠宮）山陰線御西下の際、沿線に「露艦来降地」と大書した大看板をたて、真島の展望哨趾に大日章旗を掲揚しなお海上には露艦引揚作業船を出動させて、沈没の地点をはるかに車窓より御覧に入れた。供奉の福邑島根県知事は殿下を山口へお送りして後、帰途和木に立寄り海上の引揚作業を視察し、あわせて記念品をも観覧した。

このような由緒ある記念品の数々も時を経るにしたがい、散逸したり破損したりで次第にその面影も消えて行こうとしているのを恐れた地元有志の間に、記念館を建設し、記念品の悉くを収集し永久に保存しようとの運動が高まってきた。この運動の提唱者故和田源一氏は、

「其事（記念碑および記念館建設運動）は今より十年許り前、私が在郷軍人会長をして居た時、分会に提案したことがあります。分会では夫を村役場に申出た処当時佐々木村長が『是は良い思ひつきだが一地方の問題とすべきではない。県の賛同を得て全国的に呼び掛けるべきである』といふので出県して当時の財部知事に陳情し運動を起すことになって居りましたが、偶々当村では和木、嘉久志の両小学校の合併問題で紛争

を極めて居った際であったので、その儘延期となって居りました。其後私は私財を投じて何うしても此運動を継続したいと考へ、材料収集やら設計やらに腐心した。」

（『福岡日々新聞』昭和十年五月廿六日「座談会」）

と語っている。昭和六年頃にはこの運動もやゝ具体化し、全国町村長会長を通じて記念碑題字の揮毫を東郷元帥に懇請する所まで発展した。ところが元帥の副官から、〝どんなものを建てるのか〟と反問された時、実はまだ具体的な設計までは出来ていなかった。面くらった地元では早速本格的な計画立案にとりかゝることゝなったが、こうしたいきさつから、折角建てるならばウンと現代文化の薫を盛りこんだ立派なものを建設したいという機運が盛り上り、種々考慮の結果

郷土出身広島控訴院岡本書記（岡本可守氏）に依頼して物色の結果、広島市臨時工務課長小田能清氏に嘱託、快諾を得て現地写真を送ったが、環境や背景との調和もあり此年（昭和八年）九月二十三、四両日の休みを利用し来村を求め、アノ雄大な景観の現地踏査を得て後十一月下旬三様の図案を送られたが、本年（昭和九年）一月元旦の拝賀式後村有志と協議撰定をなし、経費七千五百円の計画で既に青写真も整ひ浜田聯隊区司令官の諒解賛助を得、更に呉鎮守府に出頭して賛助を仰ぐ筈。

（山陰新聞　昭和九年五月二十八日）

と具体化してきた。この記念碑は「露艦来降記念碑」と仮称し、海軍当局その他関係方面と接衝の上最終的に決めることゝしたが、設計によると

碑は日本海の怒濤を眼下に巌頭高く軍艦艦尾を表現した台に高さ三十一尺九寸（約九、七メートル）大さ四尺二寸（約一、三メートル）に四尺八寸（約一、五メートル）の半楕円形鉄筋コンクリート造り。花崗石張りの堂々たるもので、碑上さらに十尺（約三メートル）の旗竿を樹て竿頭には来降当時イ号檣頭に掲げていた降旗B・N旗を形取った旗をつけることになっている。

（朝日新聞　昭和九年五月二十八日）

と、まことに堂々たる構想であった。さらに附帯事業として経費三千五百円を投じて記念庫と記念館を作り、当時のボートその他を収納し且つ村内外に散在している百数十点の記念品を収集し、当時の目撃者の談話感想その他の文献をもとりまとめて後世に伝えようと計画したのであった。これについて山陰新聞は昭和九年五月二十八日記事で、

この企てが経費として僅一万円の計画であるといふ。地元有志の奮起と県下の男女中小学生並に陸海の在郷軍人特に海軍側更に全国的篤志家の援助によって速かに明年三十周年の記念日を卜し竣工の悦び和木村の露西亜祭をして一段の光彩あらしめること。

を広く天下に訴え世論を喚起した。

こうして具体的な設計図も出来あがり、いよいよ東郷元帥の揮毫をお願いすることになり、和田氏は呉の海軍鎮守府へ出向いた。ところが、途中広島で東郷元帥薨去の訃報に接し（昭和九年五月三十日）悲歎のうちに帰村しなければならなかった。さらにその年秋の風水害で募金計画も一時延期の止むなきにいたった。しかし、和田氏は「此問題は和木一部落の問題ではなく国民精神作興の恰好の記念物であるから、史蹟に申請し全国に呼びかけて洽く有志の賛助の下に此記念碑建設の達成に努めたい」（福岡日々新聞「座談会」）と、ますますこの事業に情熱を燃しつゞけた。

こうして昭和十一年五月二十七日海軍記念日を卜して「露艦来降史蹟保存会」が和木地区を母

体として成立した。その会則は

第一条　本会ハ露艦来降史蹟保存会ト称シ事務所ヲ島根県那賀郡都濃村大字和木参百五拾九番地ノ九ニ置ク

第二条　本会々員ハ島根県那賀郡都濃村大字和木在住ノ各世帯主ヲ以テス

第三条　本会ノ目的ハ日本海々戦ノ際我連合艦隊ノタメ撃破セラレタル露国バルチック艦隊特務艦オルチッシュ号遁竄上陸ノ遺蹟ヲ記念シ且ツ当時ノ遺品及文献等ヲ蒐集保存センガ為、来降記念碑並ニ記念館ヲ建設シ之ヲ永久ニ伝ヘ以テ国民教育ノ一助タラシムルニ在リ

付、右事業ノ遂行ヲ期スルガ為メ別ニ建設協賛会ヲ設置シ、全国特志家ノ協力ニ依リ之ガ完成ヲ期ス

協賛会ハ事業終了ト共ニ一切ヲ保存会ニ引継グ

第四条　本会ニ顧問若干名ヲ置ク

第五条　本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会長一名　副会長一名　理事若干名　評議員若干名

第六条　会長ハ会務ヲ処理シ副会長ハ会長ヲ補佐シ会長事故アルトキハ之ヲ代理ス

理事ハ会長ノ命ニヨリ専ラ本会ノ事務ヲ掌ル

第七条　会長ハ会務遂行上必要アルトキハ評議員会ヲ開催シ協議ヲナスト共ニ顧問ノ意見ヲ求ムルコトヲ要ス

第八条　本会ニ要スル経費ハ一般篤志家ノ寄附ヲ以テ之レニ充ツ

第九条　本会ノ主旨ニ賛同シ金品ノ寄贈ヲナシタル者ハ賛助員トシテ永久ニ其ノ芳名ヲ伝フ

第十条　会長ハ必要アルトキ総会ヲ開催スルモノトス

附　則

第十一条　本会ハ昭和十一年五月二十七日ヲ以テ設立ス

この会則にもとづき「日本海々戦露艦来降史蹟保存会事業計画書」「日本海大海戦記念塔記念館建設趣旨」が作成された。計画書は

本会ハ会則第三条ニ掲グル目的達成ノタメ左ノ事業ヲ行フモノトス

一、史蹟指定申請

露艦来降上陸趾地ヲ日本海大海戦史蹟トシテ指定セラルヽ様其ノ筋ヘ申請シ之ガ実現ヲ期ス

二、来降記念碑建設

イルチッシュ号乗組員上陸趾地ヘ堅牢耐久ヲ主トシタル記念碑ヲ建設シ、漸ク国民ノ脳裏ヨリ滅却セムトスル大海戦ノ趾ヲ世ニ顕揚スルト共ニ、之ヲ永ク後世ニ伝ヘ皇国青史ニ光輝ヲ添ヘ更ニ軍事思想ノ普及ト国防観念ノ啓発ニ資セムトス

三、記念館ノ建設

日本海々戦後茲ニ三十年露艦イルチッシュ号来降当時ノ記念品モ漸次逸散或ハ腐朽セムトスルニヨリ之ヲ悉ク蒐集保存ノタメ記念館ヲ建設管理ヲ厳ニシ以テ後世人ノ史ヲ語ル史料タラシメムトス

尚記念館ニハイルチッシュ号来降当時ノ状況ヲ録スル文献及海軍当局其他ヨリ海戦当時ノ戦利品ノ払下ヲ受ケテ之ヲ陳列シ一般ノ参観ニ供シ大戦ヲ偲バシムルト共ニ海事思想ノ普及発達ニ資セムトス

その趣意書は次のようにいう。

遠くはテルモピレ無敵艦隊アーマダの撃破トラファルガーの海戦はギリシャをしてギリシャたらしめ、一小英国をして大英国たらしめたことは言を待たぬ。乍去近代を貫いて欧亜両大民族の運命を決定し深甚なる大影響を全世界に及ぼし、欧洲大戦の一大素因を為したものは日本海大海戦であったと断ずることを得る。日露大海戦即ち我東郷か彼のロジェストウェンスキーかの孰れかゞ此の有史以来の民族的大接戦に於て雌雄

を決し、何れに凱歌が上るかは当時全世界が実に片唾を呑み、その結果如何を知るべく焦慮していたのである。対馬海峡の勝利は日本に帰し軍配は東郷に揚った。此の報一度伝はるや我は歓喜に満ち彼は憂愁に沈んで了った。蓋し此の海戦こそ実に日露両国の興廃は勿論、その程度の差こそあれ世界の各国家民族一として重大なる影響を蒙らぬものは無かったからである。

此の大海戦の顚末は史上に極めて詳細に述べられていて敢て茲に叙述の必要を認めぬが併し此の大戦の混乱中にあって吾人の忘却を許さぬ一大教訓的遺跡が存する。

今より三十一有年前即ち明治三十八年五月二十七日の此の大会戦の翌二十八日午前十時三十分、我が都濃村真島沖合二海里に突如一敵大艦がその巨体を現はし村民を驚愕せしめた。然るに頓て白旗を上げ救援を求むる信号を為し貨物を放棄し乗組員の大部分は大小六隻の短艇に移乗し上陸せんと努力せしも、怒濤澎湃し波浪に呑まれ一同将に転覆の大危機に臨んでいた。陸上遙かに此の情景を目撃した村民は何んぞ躊躇せん、例へ敵であっても救けを求むる彼等が海底の藻屑となるを見るに忍びず、男女を問はず裸体になり一命を賭して逆巻く怒濤に跳り込み一人も余さず悉く救助し且つその介抱に努めた。

我国を一撃の下に粉砕して再起の希望を絶たしめ亜細亜の一小民族として永久奴隷の境涯に泣かしめ、光輝ある三千年史を断絶せしむるかの意気と使命を帯びて来た。嗚呼大露西亜の将兵も事志と違ひ遙々欧洲バルチック海から回航征途に勇み上って来て、今やその懐しき自己の家イルチッシュ号の海底深く行くのを万感迫りつゝ眺めながら敗惨の影うすき身を敵たる日本国民の手厚き介抱に委ねつゝあった。其の情況は実に世界史上の一大悲劇であった。

由来我が村民はこの沖合たるその遺跡を眺むる毎に当時を回想し、特に此の事件の当日たる五月二十八日を日本海海戦記念日として忘れぬ為に之をロシア祭として記念式を行へる事三十一回、乍去当時の青年たり

し今日の古老は勿論、その後継者たる当時の少年も歳経ると共にその数を減し、往時の光景に関する記憶の次第に去り行くは蓋しれ免ぬ事である。

惟ふに此の遺跡こそ実に我日本民族の美しき人道愛の発露であり、日露陸海戦を通じて露国の将兵が我本国領土に於て降伏し我等に救助を求めたるは唯この地に限る。今や世界の各民族は或は平和を熱望し或は自己の慾望にのみ吸々として寧日がない観がある。此の混乱の中にあって衷心世界の平和を願望しその実現に日夜肝胆を砕いて我々は此の過去三十一年前の大悲劇を徒らに反覆せざらんことを切願している。

この実状に鑑み我沖合遙か日本海に於て砲声咽々我等の耳朶を圧した大海戦当時を追想し、併せて崇高なる日本精神即ち人類愛の一発露の表徴たる我村民と露国将兵間の麗しき往時の情景を追懐し、之を広く内外不易に伝ふるため、その第一歩としてこの思ひ出深き遺跡たる都濃村真島岩頭に一記念塔並記念館を建設する事は有意義なりと思慮しその計画を樹てゝ各位に訴へ、絶大なる御後援の下にその完成を熱望して已まざる次第である。

昭和十一年五月二十八日

日本海大海戦　イルチッシュ号来降史蹟保存会

と、まことに雄渾な大文章をもって各方面にその協力を呼びかけたのである。そして建設に要する資金の収支予算を次のように計画した。

収入之部

一金壱万円

本会ノ趣旨ニ賛同セラルル有志篤志家ノ寄附金

支出之部

一全壱万円

内訳

金六千円　記念碑建設費
金壱千円　記念庫建設費
金弐百円　寄附金募集費其他諸費
金参百円　落成式諸費
金弐千円　維持費
金五百円　予備費

以上が保存会の大要であるが、役員は左のように決定した。

会長　和田源一（都農村収入役、元在郷軍人分会長）
副会長　岩竹多三郎（都農村々会議員）
顧問　森脇吉郎（都農村村長）
〃　盆子原利七（〃右助役）
〃　小川宗次郎（都農村々会議員、〃学務委員）
〃　松浦義光（都農村西小学校長）
理事　石戸重頼
〃　岩竹団治郎（都農村々会議員）
〃　盆子原栄三郎（都農村役場書記）
〃　三本松実（在郷軍人分会副会長、都農村学務委員）

評議員　和田筆市（都農村々会議員）
〃　三本松勘三郎（都農村々会議員）
〃　盆子原岩雄（都農村青年団長）
〃　岡本卯太郎
〃　井口愛太郎（都農村区長）
〃　花房茂助（〃）
〃　岡本軍次郎（〃）
〃　盆子原八重吉（〃）
〃　大嶋文市郎（〃）
〃　井口吉太郎（〃）
〃　岩竹茂作（〃）
〃　佐々木吉太郎（〃）
〃　今田政重（〃）
〃　花房茂三郎（〃）
〃　出雲順之助（〃）
〃　森脇正規（〃）
〃　金保重明（〃）
〃　丸毛郷（〃）

保存会はこの会則にもとづき早速活動を開始した。記念碑ならびに記念館建設資金一万円の捻

出については

地元二千円。県下全小学校学童十二万人一人一銭として千二百円。中学校女学校生徒一人拾銭宛千二百円
在郷軍人会一分会五円宛として千二百円。尚武会同じく千二百円。台湾全島有志より三百円。朝鮮在住有志
より二百円。東京、京阪神、名古屋、広島等有志より二千円。

の目標を定め、六月二十六日付をもって「日本海々戦戦蹟保存ノ目的達成ノタメニ行フ事業実施ニ要スル金品募集のノタメ『寄附金品募集許可願』書」を島根県知事宛提出し、会長和田源一氏、理事石戸重頼氏、仝盆子原栄三郎氏は上京して郷土出身の知名人にあたり募金運動を展開することになった。その時の模様を和田氏は「帝都日誌」に克明に記している。

六月二十一日　日曜　好晴　（昭和十一年）

一、午前八時三十分入京、東京市神田区錦町三ノ三、日東館投宿

一、先着石戸重頼先導宮城遙拝、明治神宮参拝大業完成ヲ祈願ス。

一、午后四時、陸軍省整備局動員課長長谷川大佐ノ自宅ニ電話ヲナシ、明日ノ会見ヲ申込ムモ御家族ニ病人アリ取込中ニテ更ニ翌朝九時出勤先ニ電話スルコトヲ約ス。

一、盆子原栄三郎長途ノ旅行ニ（以下空白）

二十二日　月　曇後晴

長谷川大佐ト会見シテ方針ヲ決セントス、午后四時陸軍省ニテ会談。

三十三日　火　晴折々曇

栄子訃ヲ聞ク、俵代議士、沖島氏（沖島鎌三氏）筒井珠三郎氏ト会談、岡村老人トモ語ル。懇切ナ老人也。

募金至難ヲ感ス。

滞京三日にして早くも募金の困難に逢着した。和田氏はこの日誌の中で「栄子訃ヲ聞ク」とのみ記しているが、この日俵代議士を訪問するため午前七時旅館の玄関を出ようとする時「栄子二時半死す知らすサキ」と奥様からの電報を手にした。（栄子嬢は和田氏の姪。当時在鮮中の山田判治氏の息女であるが、病気療養のため和田氏が親代りとなって面倒をみていた）和田氏は「痛恨無限」とその電報用紙に認め早速「われ力足らず、遂に逝くか。あゝ無念なり、お詫びす。父も栄子の心を思い感無量。われ帰れぬ。はるかに冥福を祈る。」（電文は読み易いように原文を平がなと漢字に改めた。以下の電文も同じ）と無量の感慨をこめた電報を送り、悲しみを乗りこえて募金に奔走した。和田氏の胸中察するに余りある。

二十四日　水　曇小雨

九時半沖島秘書ト会見、井上、作間大佐ト会フ。長谷川大佐ト会見、午后海軍省ヘ赴ク約束ナリシガ長谷川氏都合ニテ中止ス。

二十五日　木　曇又晴

稍々焦躁ヲ感ズ、正午長谷川大佐ト海軍省ヘ赴ク。望ミ少シ。午后三時島田大臣ト会談、前途不容易、仁人作間氏来訪サル。

この日「露艦来降記念塔その他計画に対する作間大佐の意見書」を受けた。それによれば、

一、記念塔ノ位置

真島尖端島頂ノ予定位置ハ至極適当ト認ム。

一、記念塔ノ設計

誠ニ結構ニシテ当事者ノ御苦心ニ対シ深甚ノ敬意ヲ表ス。只漂流記念碑ノ文字ハ考慮ノ余地アリ。

一、記念館ノ位置

和木（西）小学校内ヲ最適ト認ム。

(イ) 小学校ハ国道ニ副ヒ交通便利ナルコト。

(ロ) 元々記念館ノ目的ハ国民精神ノ作興ニアルヲ以テ、小学校内ニ建設スルガ最良ナリ。

(ハ) 参観者ニ説明ヲ要スル場合ニモ校長以下教員多数在校サレ甚都合ヨシ。

(ニ) 記念品ノ大部分ハ小学校ノ所有ナルヲ以テ一層校内ニ記念館ノ設置ヲ可トス。

学校沿革誌中第十四章雑件「敵兵ノ収容」ノ項ノ如キ参観者ニ最モ興味ヲ感ゼシムベシ。

一、記念館ニ図書室附設ノ件

記念館ニ図書室ヲ附随セシメ簡易図書館トシ相当数ノ図書ヲ備付ケル外、県立図書館ノ巡廻書庫閲覧所トスルヲ可トス。

一、国道ヨリ記念塔ニ至ル道路開設ノ件

記念塔建設ト同時ニ道路ノ開設ヲ要スルハ論ヲ俟タズ、記念館ト記念塔トノ連絡ニ便ナル様路線選定ヲ要ス。

一、労力奉仕ノ件

現下所謂非常時ニテ国民全般緊張努力シツヽアル際ニ付、他郷ヨリ募集セル資金ニヨリ都濃村内ニ工事ヲ起ス次第ニ付、地元村民各位ハ応分ノ労力奉仕ヲナシテ工事費ノ節約ヲ図リ（最小ノ費用ニテ最大ノ効果ヲ挙グル意味ナリ。）出来得ル限リ堅牢雄大ナルモノデ後世ニ遺サルルコトハ各位ノ寄附者ニ対スル義務ナルノミナラズ、村内子弟ニ対シテモ最良ノ教訓トナルベシ。

一、材料費寄附募集ノ件

前頃ノ如ク労力（特殊ノ技術ヲ要スルモノヲ除ク）ハ地元ニテ奉仕スル立前ニシ之ヲ公表シテ一般篤志家ノ寄附ハ材料費トシテ、例ヘバ「セメント」一袋代等ノ名義ニヨルモ案外寄附者ノ好感ヲ得ル方法カト信ズルニ付御参考迄申添フ。

昭和十一年六月二十五日夕

東京神田錦町　日東旅館ニ於テ認ム

海軍大佐　作間応雄　花押

懇切丁寧な作間大佐の助言に力を得て再び和田氏らの奔走がはじまる。

二十六日　金　曇又晴　蒸暑

桜内幸雄、佐々田懋ニ会フ。金ヲ出サズ、先ツ国人就中島田大臣ヨリト曰フ。募資益々難キヲ益栄君ト語リ合フ。午后堀由蔵氏ヲ訪。不在ナリ。

二十七日　土　小雨後曇

募金策ニ腐心シ寄附金台帳ヲ作製。盆子原君退京ス。（この日「連日の労苦を謝し各位の健斗を祈る」という史蹟保存会よりの激励電報がとゞいた。）

二十八日　日　雨

日曜日ニ付終日在宿シ事業計画書、資金捻出試案、建設協賛会規定書立案ス。

二十九日　月　雨

沖島氏ヲ私邸ニ訪問共ニ官邸ヘ。農相閣議ニテ来ラズ。

三宅重次郎氏往訪。金拾円受。岡村老人訪問、再ビ大臣官邸ヘ行。志不成、堀氏ト晩食。

三十日　火　曇後時々晴

村上源太郎ヲ訪フ。島田大臣ト会ヒ慈訓ヲ受ク、志愈寂タリ。作間大佐ニ語ル。水交社ヘ、沖島氏夫人病危ク鎌倉ヘ行キ不在、意不果。

七月一日　水　曇後雨

島田ヘ苦衷ヲ書状ニテ訴フ。岡村老往訪、側面運動ヲ依頼ス。作間大佐三度目ノ来訪、夜村上源太郎君ト佐々木秀夫ヲ訪フ。

（この日「植付終り雨にもあきた。各位の健康を祈る」という都濃村議員一同よりの激励電報を受けとる）

二日　木　霖雨

岡村老人ヲ訪フ。暫ク時ヲ待テト。然リ月末兼期末、中元也。夜世羅田君来リ五拾円也申込マル。多謝。

三日　金　薄曇

若槻礼次郎ヲ訪ネ会見セズ。横浜ヘ、沖島氏夫人死去スト。

四日　土　薄曇

横浜市ニ滞在、沖島氏夫人死亡ノ報ヲ石戸君ヨリ受ケ弔電ス。

（この日「功をあせらず第一期工作として邁進されたし」と保存会から激励電報をうける。）

五日　日　晴

江ノ島、鎌倉ニ遊ビテ夜帰京ス。

六日　月　雨

四度岡村老ヲ訪ネテ懇願ス。午后在宿思案、嚢中無一物也。進退窮ス。

七日　火　曇後晴

石戸兄俵氏ヲ訪ネ彼個人トシテノ工作ヲナサシム。午后和田、堀由蔵氏往訪ス。

八日　水　曇

山田政明兄始メテ来訪ス。入京以来ノ処置悉不当ナリシト悔ユ。午后森薫兄往訪、岡村老ヲ又尋ヌ。

九日　木　曇後雨

山田政明、作間両兄ヲ訪ネ、後沖島氏ト官邸ニ会ヒ百円受。次デ元気ニ俵氏ヲ訪フ。大暗礁ニ乗リ上ゲタ

十日　金　小雨後晴

有馬種市氏ヨリ弐拾円送リ来ル。山田政明兄来リ共ニ昼食、石戸俵ヲ訪フモ出金セズ。進退茲ニ谷マル。午后長谷川、熊谷ヲ往訪ス。

十一日　土　夜雨

沖島氏ヨリ金五拾円受。作間大佐ト記念撮影半日ヲ過ス。遂ニ募金断念退京決意ス。

十二日　日　曇後晴

島田大臣私邸ヘ。石戸個人的工作ニ奔走スルモ奏功セズ。池袋往訪不在、失望。形勢益々切迫ス。

十三日　月　雨

山田政明兄雨中来訪、金拾円受ク。岡村老人ヘ挨拶ニ行ク。石戸必死ノ工作昨日来打電二通ニモ及ベド奏功セズ。無念ナルモ一人今夜退京ト決心打電ス。

（原文のまゝ、但し（　）内及び傍線は編者）

和田氏の「帝都日誌」はこゝで終る。和田、石戸氏の心死の工作も涙ぐましい努力もついに報いられず、遠大な計画によって開始した募金運動もこゝに一頓挫を来した。その上手続上の問題などもあり、九月二十八日「寄附金品募集許可願取下願」を次のように島根県知事宛出して、一時成り行きを静観しなければならなかった。

寄附金品募集許下願取下願

昭和十一年六月二十六日附ヲ以テ日本海々戦蹟保存ノ目的達成ノタメニ行フ事業実施ニ要スル金品募集ノタメ「寄附金品募集許可願」提出致置候処、右ハ寄附金品募集以前ニ於テ史蹟地トシテノ指定申請ヲナシ指定ヲ受タル上保存会々則ノ変更ヲナシ、改メテ寄附金品募集願致度候間、サキニ提出致候願書ハ一応御取下被下度此段及御願候也。

昭和十一年九月二十八日

那賀郡都濃村大字和木参百五拾九番地九

日本海々戦露艦来降史蹟保存会々長　和田源一

こうして募金より先に史蹟指定の申請に専念するころ、昭和十二年七月七日芦溝橋事件が勃発した。それはついに日華事変へと拡大し、さらに太平洋戦争へと発展、国家総動員体制から国土決戦という超非常事態に追いこまれることになった。このような事態の前には史蹟申請も記念碑建設も考えることすら出来なくなった。こうして終戦を迎え、すべてはその出発点から出直さなければならなかった。

第三章　イルティッシュ号後日譚

一、金塊のナゾ

「『イルティッシュ』号の沈没ハ悲シイ事デハアッタガ又安心シタ。今ヤ『イルティッシュ』号ハ此ノ世界カラ永久ニ失ハレタ。何者ガ能ク此ノ『イルティッシュ』号ヲ再ビ海面ニ持チ来リ得ベキモノカ」と、イ号事務長士官G・K・グラフはナゾのような言葉をもってその『手記』を結んだが、明治三十八年夏、舞鶴鎮守府工務部によってイルティッシュ号の第一回引揚作業は開始された。この時の主目的は機械備品等の引揚げであったが、結局は目ぼしいものは引揚げることができなかった。それで翌三十九年夏イルティッシュ号を競売に付したが、このとき栃木県選出の貴族院議員持田若狭（佐）氏が二千三百五十円（読売新聞記事によれば三千二百円）でこれを落札した。持田氏はその後明治四十一年頃まで引揚作業を続けたが、スクリュー三本、錨五個、樽入ウオッカが数個引揚げられただけで作業を中止した。

その後イルティッシュ号は広島の宮田伊太郎氏、宇品の二川光太郎氏、稲田総平氏、さらに下関の福屋某氏、宇部の山形猿之助氏と転々と身売りされ、最後に昭和八年一月、五万円で長崎の北村滋敏氏の所有となった。問題の北村氏が異常な情熱をこのイルティッシュ号に傾注し、その引揚げに半世をかけるに至った経緯を『週間新潮』第十六号（昭和三十四年四月二十日号）は次のようにのべている。

昭和八年六月、長崎市馬町に住んでいた北村滋敏さんは、当時兵庫県須磨沖に沈んでいた大阪商船所有の別府通い船、屋島丸の引揚調査をしていたが、この調査のため須磨の松風町に一年間滞在したとき、たまたま神戸の湊川神社前で食堂を経営していた山谷慶次郎氏と、やはり神戸の人で英国に十三年もいたという中島澄人氏の訪問をうけた。その用件は、ウイッケンという元ロシア海軍中佐（当時ドイツ染料株式会社＝本社は露国＝の神戸支店倉庫課長）に依頼されて、北村さんの所有しているイルティッシュ号を譲ってくれ、というのであった。

神戸のトーア・ホテルで北村さんは通訳浜田某氏（当時神戸水上署員）をまじえてウィッケン氏に面会した。ウィッケン氏は最初十五万円で売ってくれ、と切り出したが北村さんは受けつけない。そのうち、とう五十万円にまでなったが、やっぱり「うん」とは返事しなかった。そこでついに最後の切札としてウィッケン氏はイルティッシュ号に巨万の財宝が隠されていることを告げ、その証拠だといって、同艦事務長ジー・ケー・グラフ中尉の『航海日誌』（秘密出版物）を示したのであった。

北村さんが浜田氏に読んでもらうと正しくそれは本物の航海日誌で、そのとき艦の売買は成立しなかったが、その代り二人で共同して引揚作業に取組もうということになった。

同年の暮れ、北村さんとウィッケン氏はサルベージ会社を作るため上海に渡った。ところが「ロシア人と共同で仕事をするのは危険だ」という周囲の注意があって、北村さんはとうとう会社の設立に手をつけないでやめてしまった。そして上海でウィッケン氏と別れる時、こんどは逆に北村さんの方から「その航海日誌を譲ってくれ」と頼みこんだ。当時の金で三千円。こうして北村さんは自分の所有物であるイルティッシュ号に金塊が積んであるという〝唯一絶対の証拠〟を手に入れたのである。

どのようないきさつでウィッケン氏が熱望のイルティッシュ号の譲り受けを断念したのか、また秘蔵の『航海日誌』を僅か三千円で北村氏に譲る気になったのか疑問は残るが、とに角『航海日誌』（『元露国特務運送船「イルティッシュ」号事務長士官手記』）は北村氏の手に入った。

その後、北村さんは、ありとあらゆる業者や金主と組んでイルティッシュ号の引揚げを計画したが一簡単に並べると、①昭和九年、上海でモーラー汽船会社の社長エリック・モーラー氏および上海商工会議所会頭S・Hピーク氏の両英国人と組んでイルティッシュ号引揚会社をつくったが、軍部の反対で立消となった。（この時の事を『読売新聞』は次のように記している。――上海日本領事官池田安蔵副領事の世話で日英合弁の「イルテッシュ・サルベージ会社」（資本金六十万ドル）を設立、英人が現場を調査し、上海の英字紙ノース・チャイナーデーリーニューズ（一九三四・六・一付）に全容が発表されるなど、引揚げ実現が予想されたこともあったが、ときの大蔵大臣高橋是清氏が引揚げ許可申請をにぎりつぶしたため会社設立以来七年目で解散した。）

②昭和十二～三年にかけて大阪の機械屋高畑某氏の協力をうけたが、資金難と潜水技術の低さのため失敗その後二、三の事業家と共同でやったが、出資者同士の争いのため流れた。

③昭和十八年、やっと独立で作業に着手したが、その年の八月十四日、江川の大洪水のため、引揚作業船の全部を流失計画は完全に座折し、北村さんは無一文となった。

④昭和二十六年、広島の土建業戸田組に協力を依頼し、八百万円の資本で作業を開始したがやはり失敗。この時戸田組は江津市で約百万円の借金を作った。

⑤それでも北村さんはあきらめず、一たん住友金属（当時は扶桑金属）に、「船は売るが中身は売らぬ」という条件つきで売却（八百万円）したのを、さらに同郷出身の桑原用二郎氏（有名なサルベージ会社である東京の松庫商店社長）に買い戻してもらって、昭和二十七年三千万円の資金で作業にかゝったが、これも

失敗した。

以上が『週間新潮』にのせられた記事であるが、『島根評論』（第百四十一号＝昭和十二年六月刊）によれば

爾来風雪三十年、好箇の魚附場として漁民を欣ばしたものゝ誰いふとなく、特務艦であるだけに、バ艦隊各艦に配給すべき食糧や美酒ウオッカの瓶を満載した上、兵員に支給すべき二百六十万ルーブルの金貨を艦長室の奥に蔵したまゝ、永久の眠に就かうとしていることが囁き交はされた。尤もこれは単なる噂や推測ではなく、確証があるといふのだから、インフレ時代の絶好話題たらざるを得ない筈であった。

果して一昨年の夏（昭和八年八月）ナヒモフ号引揚で有名な北村儀八氏の手によって解体引揚作業が開始された。

この時浜田出身の作家三枝劉二こと村田義光氏は、わざわざ東京から帰浜して、松陽支局長の佐々木氏を通じて北村氏に頼み、自から志願して潜水し、イルティッシュ号の実態を自分の眼で観察し、『日の出』十二月号（昭和十年？）にその体験記をのせた。少し長くはなるが興味深い文章であるのでその一部を掲げておこう。

四日目、いよ〳〵東氏以下二名の潜水夫に身を守られて、イルティッシュ号訪問である。

呼吸の仕方のコツ、命綱を引く暗号をくれぐれも教えられる。普通の作業服に身をかため、八貫目もある鉛帯を腹に結びつけて、タオルでしっかり頭をしばる。……エアー・コンプレッサーが快適な活動を開始する。こいつ奴、今日ほど有難いと思ったことはない。……

東氏が先づ舷側の梯子から海中へ消えた。ブクブクと泡が紺色の海面へ不気味に浮き上る。つゞいて僕だ一尺！二尺！僕の体は地獄の階段を下りて行く。梯子がなくなった。えゝ、まゝよ。両掌を合せて投身自殺

よろしくとび込んだ。体のズイまで潮がしみ込んで、奴ダコのやうになって海中降下だ。

一尋、二尋、太陽の光芒が水中に七色の虹をえがいて、他ははてしない水、水、水だ。おびたゞしい魚群が音もなく往来する。今日は幸いにも黒潮が来ていないので、海中はスクリーンをかけたレンズのやうに明るい。

降下三十秒、二十三尋だ。全長百五十間の巨体が黒々とふんぞりかへっているのが見える。東氏のグラスが、くずれた司令塔の上でキラキラ光る。まるで海草のゆらぎのやうに不気味に見える。

手招きがしきりだ。

とう〳〵降りた。デカイぞ！　石炭をたけば、また黒煙を吐いて走りさうな感じだ。

「イルティッシュ号よ、こんちは！」

と挙手の礼をしたとたん！　さっと水をきって横を走ったものがある。

鮫だ！　丸鮫だ！　七尺は充分ある。てへッ！　これだから海の散歩は出来ない。……

艦体にはカキがいっぱいカサブタのやうにくつついている。機関部に大きな穴が開いている。北村氏の作業はこゝの爆破から初めているらしい。デカいマストが降伏を示しているかのやうにへし曲っている。……

東氏の先導で甲板を進行する。足はふら〳〵の浮腰だ。……

東氏が艦首のウインチの下のダンブルの前でとまった。倉庫の入口だ。この中に修繕用の鋼鉄、銅がざっと三千万円がところつめ込んである。が、ふんでも蹴っても開かばこそ！

命綱に信号が来た。キュツ、キュツ、キューツ！、何？　もう上れ？　あがれるもんか。これからいよいよ艦内へ入るんだ。こゝらあたりからそろ〳〵怪奇の世界だ。行く手は正に水の闇、それに猛烈な魚類の攻撃だ。……おっ！　おっそろしい蛸の頭だ！　一斗樽は充分ある。いよ〳〵八本の手で歓迎か？

大急ぎ、傍らの棒切れを構へて、ケツとついてみた。チーンと石のやうにかたい。なーんだ。敷設水雷の空っぽのやつだった。……

先導の東氏のグラスがこちらを向いた。闇の中でキラリ物凄く光る。めざす艦長室に来たのだ！ 僕は勇躍しでドアに迫った。かうなれば、魚の攻撃なんかもう問題ぢゃないんだ。このドアさへ開けばいゝ、引いてみた。押してみた。蹴ってみた。叩いてもみた。だが相手はおちついたものだ。ビクともしない。

畜生！ このドア一つ向ふに金貨とウォッカが！ もう一度勇をふるって迫ったが駄目。胸はだん〳〵苦しくなる。上からは「上れ」の信号がひんぱんだ。東氏が「よせ」と合図する。癪だからもう一度大きな最後的ノック。と、奇！ 怪！ コツ〳〵と内から軽い答礼だ！ わッ！、思はず一、二歩退いてふり向いて見ると、もう一人の潜水夫が何かをコツ〳〵叩いている。その音の反響だ。

と、彼氏が僕の手をしきりに引っぱる。感覚のにぶった手の先に、カキのくっついた四角の箱らしいものがさぱった。

お！ 金庫だ！

暗くて眼には見えないが感触はたしかに金庫だ。上陸間際にあわてゝ艦長がこんな所へ捨てたのだらう。しめ〳〵二百六十万ルーブルだ。

それを抱へて東氏が急いで出口の方へ連む。海底の凱旋行進だ。呼吸の苦しみなんのその、堂々魚群の攻撃を尻目にかけて出口へ出た。水明りで見ると、たしかに金庫だ。すこし軽いやうだが、これは水圧の関係であらう。グラスの底で、二人の眼が喜悦の感激にもえている。

「海底の宝庫よ、さやうなら！」

それでも、いとも正しく挙手の礼を軍艦におくったときだ。送空管が、急に、つまりだした。

あ！ いよ〳〵最後が来た。キカィ奴、此方の手許をつけこんでストライキを始めたらしい。まゝよ、運命を水に任せよう、眼からナミダがでゝ鼻へ侵入する。クシャミがしたいが、クシャミをすればことだ。水が突入して腹がふくれる。東氏の口から泡が無数に浮く。はゝア！ これは潜水病予防の息ぬきだな。

そこで、僕も懸命になって、口から泡をふいた。

上に上に。だん〳〵明るくなって、太陽の光芒がさし込む。

やっと上った。何といふ明るさ、何といふほがらかさ！ やっぱり、人間陸が一番いゝぞ！

結局村田氏が金庫だと思ったのは、空の油タンクであったが、村田氏も金塊はまだ断念するには早いといっている。（『島根評論』第百四十一号）

以上が『島根評論』の述べるところであるが、これによれば八年の八月にはすでに金塊引揚げということで地方紙を賑わしているのである。『週間新潮』の述べるところと若干のズレがある。事実、昭和八年八月澄宮殿下の山陰線御通過の際にはすでに北村氏によって引揚げは開始されていた。

ともあれ、イルティッシュ号は巨万の富を秘めて海底深く眠っている。その秘密のカギがG・Kグラフの『航海日誌』にあるというのである。ではこの『航海日誌』とはいかなるものだろうか。

『元露国特務運送船「イルティッシュ」号事務長士官手記』と題するこの航海日誌は、「秘密刊行物」と銘うったロシア語二百七十二頁にわたるものである。北村氏の手に入れたものはその第二版で、一九一二年セントピータースブルグ（今のレニングラード）で「ノビコフ中尉」によ

って再刊されたものである。この原本の一部が英語に訳され、さらにそれを中島澄人氏が日本語に翻訳した。これを北村氏が謄写印刷にして関係方面に配布した。これが問題の『航海日誌』である。その中で問題の箇所を摘記してみると、

元来「イルティッシュ」号ハ非常ニ多額ノ海軍ノ信用小切手ヲ持ッテ居タノデアルガ、コレマデニ夫レヲ現金ニスル機会ガナカツタ。ソレデ我々ノ船長ハ「レスビー」号ノ艦長ト相談ノ結果私（G・K・グラフ）ヲポートサイドマデヤツテ其処ノ銀行デ海軍小切手ノ一部ヲ現金ニ替ヘヤウト云フ事ニナツタ。……

船長ハ私ヲ呼ンデ大急ギデ必要ナル書類ヲ作成シテ次ノ朝コヽヲ出帆スル「マラヤ」号ニ乗リ込ム様ニ命令ヲ下シタ。ソレデ私ハコノ予期シナイ然シ必要ナ航海ニ対シテ多大ノ興味ヲ感ジタガ同時ニ「イルティッシュ」号ガ私ノ帰リヲ待タズニ出帆シテ仕舞フ様ナ事ニナラネバヨイガト云フ心配モシタ。海軍小切手ヲ以テ現金ヲ引キ出ス為メニ必要ナル凡テノ書類ニ船長ハ署名ヲシタ。ソレデ若シ不充分ナル書類デアレバ折角銀行迄持ツテ行ツテモ現金ヲ呉レナイ場合ニハ大変デアルカラ充分ノ注意ヲシタ事デアル。C・H君ノ助力ト私ノ努力トデ余リ遅クナラナイ内ニ書類ノ準備ヲ万端整ヘタ。長イ間私ト船長トハ何程ノ現金ガアレバヨカロウカト相談ノ結果、八千ポンド程ノ現金ガアレバヨカロウト云フ事ニナツタ。コレハ持ツテ居ル小切手ニ比シ余リ大キナ金額デハナイガ、「当分ノ航海ニハ差支ガナイダロウ」ト云フ事デアツタ。

翌朝私ノ乗リ込ンダ「マラヤ」号ハ、「レスビー」号ト共ニジプテイ港ヲ出航シテポートサイドニ向ツタ紅海ヲ経テスエズキヤナルヲ通過シ無事ポートサイドニ着イタ。

ポートサイドデ直チニ銀行ニ行ツタ私ハ、書類ヲ整理シテ提出シタ所ガ即座ニ私ハ現金ヲ受ケ取ル事ガ出来タ。私ハ多分銀行デハ紙幣ヲ呉レルデアラウト思ツテ、比較的大キナスーツケースヲ持ツテ行ツタ所ガ、実際銀行デ渡サレタノハ英金貨デアツタノデ驚イタ。ソシテソレハ小サナ布ノ袋ニ入レタマヽ目方ニカケテ

八千磅デアツタガ、直グニ其ノ計算ハ出来タ。私ハコウ云フ金貨ヲ目方デ勘定スル方法ニ馴レテ居ナイ為メニ、二、三ノ袋ヲ一ツ宛金貨ノ数ヲ改メテ見タガ、銀行員ハ丁寧ニ他ノ袋モ皆改メテ見ヨト云ツタノデ、私ハ充分信用出来ルト思ツタカラ、其儘凡テノ金貨ノ小袋ヲスーツケースニ詰メ込ンダ。丁度一杯ニナツテヤツト一人デ持テル程ノ重サデアツタ。

ジプテイ港ニ帰ル船ハ未ダ十日余リモセネバ便船ガ無イトノ事デアツタカラ、私ハ此ノ貴重ナスーツケースヲホテルニ持チ帰ルコトヲ好マナカツタ。ソウシテ銀行ノ金庫ニ其儘入レテ置イテ貰フ様ニ頼ンダノデアツタ。

ソノ間ノ日ヲ利用シテ私ハ一週間バカリカイロ市ヲ見物ニ出カケ色々三角塔ニ登ツタリナドシテ遊ンダ。ポートサイドニ帰ツテ見ルト丁度其ノ次ノ日ニジプテイニ向ツテ行ク便船ガアツタノデ、私ハ露国領事館ノ特別ノ護衛人ト一緒ニ銀行ニ行ツテ金貨ノ詰ツテイルスーツケースヲ受取ツテ、私ノ乗リ込ム船ノ舷室ニ迄運ビ入レタ。此時私ハ自分ノ義務ヲ果シ得タト云フ感ジデ大変愉快デアツタ。

……ジプテイ港ニ帰ツテ見ルト果シテ「イルティッシュ」号ハ自分ヲ残シテ既ニ出帆シテ居タ。私ノ「イルティッシュ」号ハマダガスカルノ本隊ニ合致スル為メニ出帆シテ居タ。ソウシテ私ニハ「イルティッシュ」号ガ此処デ積込ンダ食糧品ノ支払ヲスル事ト、此処カラ便船ヲ求メテ金貨ヲ持ツテサイゴンヘ行キ、其処ニ碇泊シテ居ル「ダイアナ」号ニ行キ、其ノ指揮ヲ受クベシト云フ命令ガ残サレテアツタ。ソレデ先ヅ私ハ食糧品ニ対スル支払ヒヲ私ノ持ツテ居ル金貨デシタガ、スーツケースハ少シモ軽クハナラナカツタ。……ソウシテ私ノ金貨ノ一杯入ツテルスーツケースト一緒ニ印度洋ヲ航海セネバナラヌ事ニナツタ。

とポートサイドでロシアの海軍信用小切手の一部を八千ポンドの英国金貨にかえたことを述べるのであるが、この『手記』はさらにカムランでの換金を次のように記している。

カムランデ私ハ元ノ事務長ノ職ニ復シタ。種々ノ荷物積込ミ其ノ他ノ関係上カムランハ本艦隊ノ碇泊スベミ最後ノ港デアツタ為メニ約十日間ト云フモノハ非常ニ多忙ナ日ガ続イタ。（「イルティッシュ」号ノ船長ハカムランノ銀行ニ残余ノ海軍信用小切手ヲ金貨ニ換ヘタルナリ。）

さらにカムランからヴァン・フオンに移動した後、

我ガ「イルティッシュ」号ハ他ノ運送船カラ色々ノ積荷ヲ以テ全部ノ「ハツチ」ハ完全ニ一杯ニナツタ。ナゼナラバ其時カラ凡テノ他ノ付イテ来タ運送船ハ本国ヘ送還サレタカラデアル。「イルティッシュ」号ノ前部ノ各「ハツチ」ハアラユル種類ノ砲弾ト十吋ノ弾丸デ以テ完全ニ満タサレタ。……ソウシテ「イルティッシュ」号ト「アナヂル」号ノ二隻ハ全艦隊ガ浦塩斯徳ヘ到着スル迄ノ軍需品ノ倉庫タルベキ重要ナル地位ニ就イタ。（原文のまゝ）

以上がいわゆる『航海日誌』中の「隠された財宝」に関係があると思われる記事であるが、『陽の目をみるか〝ロシア宝船〟』と題し、「金の延棒など二百億。島根県和木海岸、来月五十四年ぶりに引揚げ」（読売新聞、昭和三十四年二月二十二日付『ニュース・パトロール』）とジャーナリズムを賑わした『金の延棒』とか『金塊』とかについては、ついにこの抜粋の中からは発見出来ない。イルティッシュ号の金塊のナゾは、G・K・グラフのいう「『イルティッシュ』号ノ沈没ハ悲シイ事デハアツタガ又安心シタ…」の言葉のように、永遠のナゾ？として日本海の海底深く秘められている。

二、金塊引揚げの夢

昭和三十四年三月、和木の海岸は異常な興奮にわきたっていた。これまで何回か〝かけ声〟だけに終っていたイルティッシュ号の引揚げが、今度こそ本格的に行なわれようとしていたからである。新聞記者、放送記者、雑誌記者までの報道陣は江津に陣どり、車の往来、漁船のチャーター等々、山陰の静かな海岸は一躍時代の脚光をあびジャーナリズムの舞台に登場したのである。

昭和三十三年夏、笹川良一元代議士（元国粋大衆党総裁）から事業を請負った西日本海事工業会社（広島市宇品町武田賢社長）はすでにその七月から三カ月の基礎調査を終え、「艦体浮揚可能」の結論を出して三十四年三月上旬から綿密な計画のもとに、本格的な引揚作業に取りくむことになったのである。その計画の大要は、

まず基礎調査によってわかったことはイ号は長さ百八十メートル、幅十七メートルの艦体を艦首を南西に向け陸地と並行に深さ四十八メートルの海底に沈んでいる。艦上部は潜水作業でこわされているが、下部は砂に埋れておらず、内外部の鉄材もほとんどくさっていない。財宝のあるといわれる第四船倉の石炭庫付近は推定七百トンの上質炭が覆いかぶさり、コンクリートのように固まっているが、ダイナマイトで爆破できるという自信を持っている。このため総工費五千六百万円を投じ、作業母船（六〇トン）起重機船（四〇トン）など十三隻の作業船と潜水夫三十一入、解体作業員（ガス工）三十一人、臨時人夫延べ千人を動員。まず艦体を水中ガスで四つに切断する。石炭がコンクリートのように固まったところはマイトで爆破、石炭をパイプで吸上げる。切断した艦体は百トンの高圧タンク（十個）で海面下十余メートルまで浮きあがらせ、引船で約二十キロ離れた遝摩郡温泉津港へ運び、九月末までに解体するというものである。

これはアウトラインだが実現すると鉄材だけで二千二百五十トン、スクラップ千六百二十トン、銅。砲金百八十トン、鉛四百五十七トン、などざっと一億六千四百万円の価値がある計算。だからスクラップしたゞけで差引一億円以上の純益が見込まれ、そのうえ伝えられる金塊が発見されればそれこそ大もうけになるわ

けだ。

（読売新聞　昭和三十四年二月二十二日）

と大規模、綿密な計画のもとに着手され、その成果には大きな期待がよせられていた。この事業の当事者である西日本海事工業会社々長武田賢氏も、

今度の引揚げは、最初笹川良一さんから話があった。でも今度の話は、あまり夢のような話だし、まあ金が沈んでるなんて話はよくきくが、どれもこれも本当だったことはないし、私もはじめ冗談としてうけながしていた。また笹川さんの方でも、天下の笹川が山師のような仕事に本腰を入れたというのじゃ笑いものじゃけん、はじめは笹川さん自身、冗談口でいっておられた。そんなこんなで、最初にこの江津の金塊の話をはじめて、小一年くらいは本気でやらなかった。ところが、たしか一昨年の十一月（三十二年）だったと思う笹川さんと私と、それから船の持主である長崎の北村という人とが会って話をし、それじゃとにかく、年があけたら調査だけしてみようということになった。調査の結果本格的にやることにして、それで昨年（三十三年）の七月、北村さんと笹川さんとの間で売約契約をした。今の見込みでは、スクラップ五千五百トンはあるという予想じゃが、なにしろ船体をはかってみると幅二十四メートル、長さ百六十メートルもある。はじめは船体を六つに切断して引揚げる計画であったが、今後は十ぐらいに切り離してやらないとできないのじゃないかと考えている。

正直いって、この世界は、山師、相場師、モグリなどと世間からいわれて、白い目でみられている通り、いろいろなうまい話をきいて現場へいってみて、ガッカリすることが多い。ところが今度の場合は全くその通りなんだね。地元民がみな金塊のあるのを信じているんだ。おまけに、よその場合だと潜水夫だなどというと、のけ者にされがちだが、江津ではみながとても協力的じゃ。漁民はみな金塊があるというのを信じて

いて、ないというと怒るほどじゃけん、……大体ことしの六月までには目鼻をつける。経費は五千六百万くらいまでゞ切上げる。……（『週間新潮』十六号）

と自信満々であった。

こうした自信に対し、持主北村滋敏氏の代理として現場に出張し指揮にあたっていた北村氏の一人息子陽彦氏は

ハッキリいってぼくはサルベージという事業は批判的です。多分にギャンブル性があるからです。父に対しても従って批判的です。とにかく父はあすのパンを考えないで二十年間、イルティッシュ号の黄金ばかりに生きてきたんです。家のためにぼくが質屋に行ったことなど幾度となくあります。……ぼくはほんとうに思うんです。もしイルティッシュ号が、もっと沖か、さもなくば岸に近く沈んでいたらこんな悲劇、いや喜劇はおこらなかったと。……」（『週間新潮』十六号）

と父滋敏氏のイルティッシュ号に打ちこんだ異常の情熱と執念を語るが、引揚げに対しては批判的な見方をしていた。また、千代延江津市長ら江津市役所職員ら地元でも、

艦が沈んでいることは事実だ。しかし、財宝についてはなんともいえない。

（読売新聞　昭和三十四年二月二十二日）

と半信半疑の複雑な表情で事の推移を見守っていたのであるが、こゝに一つの問題がおこった。それは前記の村田氏の記事にもみえるように、イルティッシュ号は好個の魚巣となっていた。地元漁民としてはこの大切な魚巣を荒されることはまさに死活の問題である。この補償の問題がかなりもつれたが、結局和木漁業組合に対し三千万円の補償金を出すという事でこれは解決した。

さて、いよいよ船体の解体引揚作業がはじめられることゝなった。三月、まだ日本海には北西の季節風が強烈に吹き荒んでいた。それから真夏の太陽が砂浜をこがす八月まで、莫大な資金と労力とがイルティッシュ号解体引揚作業につぎこまれた。その間、霊感師三上敬夫氏や藤田小女姫氏らの「確実に金塊あり」の予言や、「現地には早くも一億円もらう約束の男」など、幾多の話題を提供しながら、結局は〝金塊引揚〟の夢は〝幻の宝船〟として空しく消え去ったのである。

真島の沖合二海里の海底には今も六十年の昔ながらにイルティッシュ号は静かに横たわっている。幾多のナゾを秘めながら、慾と名声に翻弄された人間社会の悲喜劇の歴史を見守るかのように―。

あとがき

明治三十八年五月二十八日、露艦イルティッシュ号が敗惨の身を真島の沖に沈めてから、今年は六十二年目にあたる。すでに還暦をすぎ、あちこちに散在していた記念品の数々も次第にその姿を失ないつゝある。何よりも当時の貴重な体験者たちがいまは殆んどなき数に入ってしまった。こうしてあの記念すべき歴史的な出来ごとも人々の脳裏から次第に消え去ろうとしている。こゝらでその記録をとりまとめ後世に遺すことは大切な仕事ではなかろうか。

この記録には二つの山がある。その一つはイルティッシュ号漂着の際に示した和木の人々の活躍である。恩讐を超えて敗惨の苦しみに打ちひしがれた人々に暖かい救いの手をさしのべ、親身になって介抱にあたった浦人たちの素朴な感情と行動とは、百の説法にもまさる平和と人間を愛する真の日本人の姿を示してくれた。こうした先人たちの尊く美しい無形の遺産をわたしたちは大切にしたいと思う。いかに国際情勢がかわろうと、時代がかわろうと、その精神を子から孫へと永遠につたえることは、わたしたちの最大の義務ではなかろうか。

第二に、和田氏をはじめとした多くの先人たちが記念碑、記念館の建設にうちこんだ情熱と努力である。ついにそれは報いられることなく終ったが、利害打算をこえた美しい郷土愛の精神に頭のさがるのをおぼえる。いま、その人たちも大方は幽冥境を異にしてしまった。合掌してその労苦に感謝の意をさゝげたい。

この記録をまとめるにあたって、引用した新聞、雑誌等の出版物は注記の通りである。こゝに改めて感謝の意を表したい。とくに非公開の性質の個人の書簡、電報、記録等も引用させていたゞいた。礼を失することを慮んばかりながらあえてこれを集録したのは、こうした尊い努力のあとを永遠に残したいからである。

あとがき

謹んで謝意を表する。なお、こゝに集録したものゝほか、未だ世に出ない記録や、体験談もかなりあることであろう。再刊の機もあらば増補訂正を期待したい。

最後に貴重な資料を、随分長い間借覧させていただいた和田家の人々にあつく感謝するとともに、筆足らずして十分真意をつくすことの出来なかったことを謹んでお詫びしたい。

（江面）

昭和四十二年十月二十日発行　（非売品）

江津市立和木公民館

編集兼発行者　代表　益子原利郎

発行所　江津市立和木公民館
江津市和木二四一番地
TEL　江津②二八四九

印刷所　青友印刷所
松江市幸町一五七一番地
TEL　松江㉑〇四七八
二〇八六